第五巻第五号

日本女子青年會 夏期講習に就て!!!

本年度に於ける夏期講習の細目に就ては未だ確言する能はざるも期日は略七月十四五日頃と內定せり。されば其が準備の一端として委員派遣の一事を云々するもあながち早計ならじと信す。蓋し委員派遣の事たる頗る重要問題にして其の撰定方法の如き愼重なる注意を要すること吾人の呶々する迄もなし、委員出席者の多少はさることながら夏期講習に於て人々の胸深く刻み付くべき感興と靈的收獲とは一にかゝつて委員諸姉の上にあり。されは其の撰定の上に力を用ふるは勿論講習の要目を作るべき各種役員の上にも神の恩寵の豊かならむことを希望してやまず。尙詳細なる項目に就ては來會せらるべき委員諸姉の助力を乞ふの外なし。會合せらるべき委員は其の在京者たると否とを問はず寄宿舍に入りて講習の終結する迄寢食起居を共にする厚意を別たれむことを望む是れ豫期の感化と功果とを擧くるに必須至要の條項なれば也。蓋し講習の目的たる一念燃るが如き熱情を以て日本に於ける各地方の靑年女子を一堂に集むることにあり。然も單に會合笑話するに止まらず、進で相倚り相助け監理者講演者の人々を親近するに至らば冀くは所期を達するに近からむか。蓋し是神の御力を我等が頭上に持來すべき最至最良の方法なりと信ずれば也。

葉櫻號

目次

夏期講習會に就て

論説

名家訪問

静思

文藝

雜纂

女子青年會記事

再び夏期講習會に就て

言ふ迄もなく女子青年會夏期講習會は各地方に於ける諸種の學校を網羅し之を一堂に集めて其の間溢るゝ斗りの熱誠と友情とを温めむ一手段に外ならざる也。元より各自の母校を愛し一念母校の爲に忠勤を擢むするは日本古來の美德として大に助成すべきを吾輩が此處に繰返す迄もなし。

顧みれば昨年七月講習會を青山學院に開くや、會する者總數一百六十有五名、代表者を送りし校數二十八の多きに上り、北は函館より南は長崎に至り靈の交りを結ばむが爲に遙々東都に來會せられしは中央委員の深く喜び感謝する所也、將に來らんとする會合に於ても前年以上の實利と功果とを收め得むことを希望してやまず。吾等は互に相倚り相會することに依りて重大なる一要題の解決せらるべきを信ず、各自の品性が革新せられ淨化せらるゝのみならず敎旨を同うする青年諸姉にとりては其の學舍の官公私立たるとに論なく互に和會し一致し共通なる主義問題の下に研究し融合すべき無二の好機たるを疑はず。吾等は單に在京の諸學校のみならず地方所在の公立諸學校よりして多數の代表者を得むことを切望す。昨夏アメリカの夏期講習に出席せられたる後藤男爵夫人及び新渡戸夫人の如き日本の爲め極度の熱誠を盡して此の程歸朝せられたり、願くは將に來らむとする第三次の會合が必ずしも數の上のみに止まらず吾等靈的修養の上に多大の功果を收め得むことを祈求してやまざる者也。

櫻花既に詩國に急いで東都はたゞや新綠青葉の樹影に埋れぬ。花は人を浮かれしめ、青葉は人を靜めしむ。然も葉櫻の色は詮する所之れ一種の動的寂美也。

あゝ如何に生々たる若葉の榮えあるよ。葉櫻の樹影靜かに足の步みを止むれば、過ぎし榮華の面影も木の實色づく行末も、只や一目の裡に讀まるゝなつかしさ。さなり青葉の色は是現在青年の記號也。經りにし過去、來らむとする行手、あゝ青葉の陰の如何に懷かしうも亦貴きかな。

友よ。世は暫し靜想黙思の時機に入れり。三春の行樂花に浮かれ月に憧れしも思へば過ぎにし過去の夢なりし。さしも麗はしかりし花も散れば、若葉萠え出る行春の野路、細雨靡々として川邊に紫雲の藤波繫靆き園には牡丹躑躅の紅白を鬪はす。嗟呼森は色付き風は薫れり。いでや靜想一掬の清水に、暫し疲れしみ靈を清めむかな。

論説

「基督を憶へ」

エー、シー、マクドナルド

我が頃日閲讀して、直接に利益を受けし書籍の數あるうちに、米人スピアー氏が、諸處の青年男女の宗教上の會合に於てなしたる講話を集めて編纂せる一巻あり。書中最も興味あるものを『基督を憶へ』（Remember Jesus Christ）と題せる一篇となす。著者は此篇に於て、一千九百年の昔、猶太の國内を徘徊して、到る處に天なる父の愛を宣傳し、眞理と純潔との貴ぶべき所以を敎へ給ひしかの大偉人の事蹟を記憶する事の實際上の利益を說き、且つ古來幾多の豪邁なる人士が、その高風を仰ぎ、その訓誨を聽きて、相率ゐて神に歸依し、死をだも猶ほ且つ辭せざりしことの偶然に非るを知らしむ。尙ほ著者は明快なる辭句を以て、人としての基督の同情を敍し、而して基督は今猶ほ活ける指導者となりて我等に就くべき所を知らしめ、我等の心情を了解し、我等を保護し、我等を誘致したまふとなす。今試みに左に篇中の數節を抄錄せんか。

* * * * * * * *

『基督を憶へ』とは、完全たる處世の規箴なり。人如何なる境遇に在る時と雖も、如何なる事態に際會する時と雖も、基督を記憶することによりて利することなきを得ず、ジョン、スチュアート、ミルは曰へり、『凡そ處世の規箴としては、基督の賞讃を受くる樣に生活するに優るものあらじ』と。されど如何にせば、基督の賞讃したまへるか、將た非難したまへるかを知るべき。是れ基督を記憶する事によりて知るの外、別に途なきに非ずや。されば『基督を憶へ』と言はん方、一層簡明にして、且つ一層適切なるに非ずや。

* * * * * *

且つ誘惑を受くる危機に際しては、基督を記憶することの如何に有力なる警戒となるべきかを想へ。我れ曾つて一學生と語りしが、彼は基督に一般普通の人と同じく、總べての點に於て誘惑を受け給ひしとは信ぜざりき。彼おもへらく、或る點に於ては、吾人は誘惑を受くれども、基督は絕えて之を受け給ひしことなしと。然れども事實は之に反するを奈何。我は基督の生涯に一點の瑕疵なく、一抹の汚點なかりしを知る。されど我は又、基督は我が誘惑を受くる總べての點に於て、我と同じく誘惑を受けたまひしことを併せて知る。されば誘惑を受く

る、每に直に「基督を憶ひ」、且つ基督が四隣人なき曠野に立ちて、惡魔の誘惑を受け給ひし事蹟を憶ひて、大に力を得ずんばあらざるなり。げに其時惡魔は有らゆる點より主を誘惑し、主として父なる神に背きて邪路に迷ひ入らしめんとは試みけるよ。我は信ず、「基督を憶ふ」人に取りては、如何なる誘惑も其力薄弱となり、又或種の誘惑は其力を失ひて、全然消滅するに至らんと。

尙ほ一步を進めて、吾人の生涯の試錬、艱難、失望の時に臨みて、基督を記憶することの、如何に有力なる慰籍となるべきかを想へ。古往今來、其督の如く絕望すべき事由に際會したりし者ありや。彼は已が國民を救はんとして來り給ひしも、國民は却て彼を棄てたり。彼の周圍に集り來りし少許の弟子は、充分に彼を了解する事あたはざりき。されば彼は其敎義の精髓を闡發し給ふに及びてや、彼等は四方に散去せり。是に於て彼は身邊に奉仕する使徒に向ひて、悲痛なる語氣にて「汝等も亦我を棄て去らんとするが」と宣ひぬ。而して是等の十二の使徒も、亦遂に彼を棄てゝ四散せり。剩へ其一人は主なる彼を敵人に賣り、又他の一人は彼を知らずと佯り、殘餘のともがらは悉く彼を見捨てゝ逃遁し、彼は全く孤立の地位に陷りぬ。乞ひ問ふ、かの背に負ふ十字架の重さによろめきながら、ピラトの殿よりカルバリの丘へと、あへぎ〳〵步み行く淋しき姿の基督より以上に、失望すべき根據を有せし者は、嘗つて世に存在せしや。又問ふ、已が過去の經歷を顧みて、「半生の鴻業、悉く一場の空夢と消えはて了んぬ」と嗟嘆する理由を有せしこと基督に過ぎしものは、いつの世いかなる時を尋れて、之を發見することを得べきや。吾人が失望し、喪心し、踏阻逡巡する時、此大悲哀の跡を憶はゞ、豈赧然として愧づるなきを得るか。苦痛とよ。吾人今日の靑年は、往時の人の如く苦痛を受くる事なけれども、而も尙ほ吾人の多くは全然の苦痛に遭遇することなきあたはず。而して時としては吾人は全く經驗なきを以て、他の嘗て之を經過したる人の助言あるにあらずんば、茫然自失してなす所を知らざることあらん。斯かる時に際して基督の事蹟を記憶せば、洵に大海に津梁を得たる感あるべきなり。

基督を記憶する事によりて、何等の稗益する所なき生涯は、無用の物たるを失はず。

實に基督を憶ふは樂しきかな。而して吾人が基督ならばなし給ふまじき事をなさまほしき誘惑に逢ふ時は、宜しく基督を憶ひて其幇助を求むべきなり。

＊　＊　＊　＊　＊

人若し上來抄錄せし數節を一讀せば、著者の勸告の如何に實際的なるかを了すべし。人若し又、基督の傳記を研究せば、其經歷の如何に淸高に、其悲哀の如何に深刻に、將た其他人の爲めに忍ばれし犧牲の如何に絕大なりしかを知り、且つ新らしき勇氣を以て、己が日々の業務に就く事を得ん。蓋し人生の意義は基督の一生に盡くればなり。「是れに生命あり、此生命は人の光なり」而して我等は主の精神を受けて世に立ち、主の敎に從ひて行動し、以て人生の病苦を輕減し、光明

を八方に遍照せしむべきなり。「基督を憶へ」とは、誠に好個の箴言とこそ云ふべけれ。我等は學校にありても、將た家庭にありても、常にこれを座右の銘となし、基督も亦我と同じく種々の業務を有し給ひ、且つ天父の榮光を宣揚する爲めに喜びて之を忠實に成し遂げ給ひしことを記憶し、克く忍び難きを忍び、成し難きを成し、以て日々の業務に精勤すべきなり。

落日夕陽の美と人生の終焉

櫻喬生

心おだやかに主の御手（みて）にねむる、たゞしきみたまのいまはのゆかしさ。

照りわたりし日の薄れゆく如く、やゝにひく潮（しほ）の靜けきに似たり。

生死（いきしに）のおそれ露なき心の、のどけきみそらに雲こそかゝられ。

（讃美歌三百三十二）

あはれ現世（うつしよ）のそら、何處（いづく）にか衰滅の色、生死の聲の響かざる。變遷榮枯は一に是れ天地宇宙の大法、生死はこれ神の命し給ふ大慈大悲の聖旨（みこゝろ）なれ。爾平として

活躍の氣に溢れたる濃緑の大樹、あゝ幾歳か生滅枯凋の春秋をば迎ぇたる。巍峨として天を摩し雲を凌がむ綠りの高峰あはれ幾百千年の星霜をや凌ぎたる。春の霞や虹の橘盛炎金波の水涸れて、湖沼泥土と化するの時はあるも、其が發散蒸昇の水煙は天上至高の雲と浮びて時に豪蕩洒然の白雨となり、夢幻神美の虹霓と現はれ清澄白玉の露と匂ひて、人世に神韻漂渺の靈氣を附與す。あゝ吾人が觀（み）て以て空となし滅となす事物も其の實眞の空に非ず滅に非ず、依然として宇宙に遍在する神の一屬性たるを失はざる也。觀し來れば生死は是れ一體一位、生や死や共に決して相容れざる性質のものに非ず。

現時の科學は吾人に敎ふるに物質不滅の方則と發展進化の理法とを以てす。自己の不滅を求め永生を希求するは是れ人類共通の感、吾人の心理には何物とも云はず現實以上眞個普遍の實在に接觸せむとする一念あるを否む能はず。よしや足跡大地を離れずとするも、吾人の心眼は高く天上極美の靈地に向て恒に活躍遊飛せ

むとする傾向を具せり。若し夫れ至純至高の愛に觸れ極度の悲哀苦痛に惱める時、何處(いづく)ともなく宇宙深秘の眞理に於て一種無限無量の意義と妙(たへ)なる囁(さゝや)きとを感受するが如き刹那に際しては、何とも云はず極美清爽の念と皷舞奮勵の熱情とを禁ずる能はざらしむ。あはれ此の一事、明かに吾人が唯現世に於てのみ生滅枯凋するものに非ざる事實を現示せるものに非ずや。

謂ふまでもなく吾人は現世(このよ)を以て完美圓滿の境涯なりと思考するに躊躇す。否幾多汎百の事實は吾人の心胸を打ち靈能を無視し汚濁穢土の感想を强めしむるものの多きをや、あゝ現實は是うたかたの夢、單なる假象にすぎずして吾人肉心の生命は必ずしも此の世界に於て盡き去るべきものに非ず。假象以上現實以外、倘崇高神美の樂境あるを想ふに於ては普遍的極美の實在に對する憧憬思慕の情を高むると同時に、又此の現實界なるものをして愈深く興味あるものと思考するを得べし。此の一念こそはやがて生鮮たる希望の光を點ぜしめ圓滿神美の實在界を眼前に現出せしむるよすがとも云ふべけれ。

さはれ生を欲して死を厭ふは人事の常、いつまでも不死長命なれかしとは吾も人も等しく希待する心情内裏の慾求なり、然も飜て一度如上の說に耳を傾けむか現實界に於ける生とは果して如何程までに貴ぶべきものなりや。死とは左程までに恐れ忌(い)むべきものなるか……蓋し是れ必然必至の聲として吾人の胸裡に深く湧き起る一大疑問なるべし。

夫れ母なる名稱は子女に對して始めて意義あるものとなる。子なき婦人は母たるの實を有せず、故に母たるをのみ求めて子女を遠くる婦人ありとせば世は異句同音に其の至愚を笑はむ。然り母てふ眞乎美しの名目は子女の爲め自己一身の利害をも沒却し、至高至純の愛を以て撫育する婦女にして始めて其が眞意義を發揮し來る。母なくば子なく、子なくば母たるの美を全ふせむこと難し。所謂母子は一體にして本然二物の性に非ざる也。然も人は唯一意生あるを知りて他面神美の死あるを知らず、よし身を死生問題に接觸せしむること

あるも勉めて是と相去り遠からむことを望む。之れ子女を遠け嫌惡しつゝも尙一念母たるの美名を喝仰慾求するものと相去る五十歩百歩也。

されど吾人は深く其の矛盾を責めざるべし。何となれば是れ世俗衆目の等しく事實として認知する所、彼等にとりては不變不動の一大眞理一大事實ともみるべきものなれば也。然も一歩を進めて其の奧侖の幕を開けば其處には理性と感情、知と情との調和融合の妙境あるを知らむ。之れ普通世俗に一歩に一歩を進めたる貴き高き光明の境涯たる也。

嗟呼、日は清く晨に東雲を紅彩に染めて夕に美し神秘の五光を點す。餘光紅に西雲を染めて黄金紫紺の幃幕麗しう「死に行くものは斯の如し」と聲なく恨みなく靜かに穩かに靜寂涅槃の境に沈む、あゝ夕陽の色の如何に壯大にして美妙なるよ。

太陽は終日萬象を照らし地上の事物を育み生物を愛撫することと至れり盡せり。雪のあした風ふく日、尙ほ密雲を散して赫炳たる光彩を放たむとす。かくて終日天地下界を照らして靜かに西山夕日の雲に入る。悠々として些の怨みならなく揚々として些の不安あるなし。如何に其の光輝の崇高にして其の容姿の幽嚴なるぞ。仰ぎ見れば銀星夢の如く大空詩美に薰して超世正覺の思ひ永へに深し。あゝ大なるもの、死や何ぞ一に壯嚴美妙なる!

吾人は輝々たる旭光を拜して希望活躍の氣慨を鍊り、落日夕陽の美に接して無限の平和と人生の眞義とを解すると同時に、旭日を知て夕陽の美を解せざるもののありとせは、吾人は未だ人生の妙境に沒入する能はざるものとして深く其人の爲めに悲しまざるを得ず。夕陽の步みや實に靜寂平和崇嚴極美也。吾等人生の業務を終えて天なる御神の召に應せむ時、願くば落日夕陽の美と靜とに匂はしめよ。

あゝ落日の美と人生の終焉!是れ所詮は同一融合の一體には非ざるなきか。生の美にして樂しむべきものなると同時に死も亦平和にして極美のものに非さるなきか。生の樂しみを知つて死の樂しむべきを了得せざ

るは恰かも旭光の美を知つて夕陽の更に美なるを解せざるものに等し。死の崇美は、眞に生の意義を觀受せものにして始めて會得するを得べし。

偉人の死を見る歸するが如きもの、畢竟死の中に一種貴き無限の意義を讀み得たれば也。楠公は湊川一朶の花と散して尙ほ蕾の正行を遺し君王邦家の守りとなせしに非ずや。基督は十字架上の露と消えても尙ほ人類同胞の爲に心情の祈りを捧け給へり。如何に美しなつかしの最後にもあるかな。我等常に偉人神子の終焉を以て意義あり崇美なるものと思考すると同時に深く生の樂しみを感し死の美なるを悟導す。吾人は落日夕陽の美に接する毎に常に此の感想なくんばあらず。

「落日夕陽の美と人生の終焉」、あゝ吾人は之をリテラリーに解して尙ほ世にも稀なる美したえなる一詩人の最後を知れり、語らむかな、崇高極美の詩話!

「時は紀元一千八百〇五年、花咲き匂ふ五月八日の夕刻。獨逸理想派の一詩人フリードリッヒ、シラーは今し重き病床の上、靜かなる夢より醒めて心既に死の近けるを知るや、最愛の少女を枕頭に呼び寄せ親しく幼兒の手を握りしめつゝ、言ふべからざる憂愁の色を湛ゑて暫し其が罪なき笑顔を見守りしが、果ては涙彷彿として幾度か紅葉の頰邊に心を込めたるキッスを與へぬ。やがて彼は今し西の端に沈み行く落日の美に接せんことを需めぬ。カーテインは揭けられ窓は高く開かれぬ。シラーは病床の上に正座し恍惚として暫しは夕陽の色の淸らに靜かなる麗しの光彩にみとれたりき、

かくて我等の詩人は今し沈みゆく夕陽の色ともろともに、獨逸の天地を五彩に染めて「モア、カームネス」more colmness の一語を後に、安らに天上榮光の御國へと上り行きぬ。あゝ天上崇美の偉人と下界の偉人たるシラーが靈とはかくて相伴ひ相接しつゝ地上を辭したる也、如何になつかしの光景にもあるかな。

Das Todes rulendes bilds stelt nichts als Schrecken dem Wisen und nichts als Ende dem Frommen.

是れシラーと手を携へて親しく獨乙文壇を横行活歩したるヨハン、ヴォルフガン、ゲーテが田園詩ヘルマ

ソウントドロテヤの中に於て吾人に與へたる教訓の一節なり。

「信仰高き人にありては死は必ずしも人生の最後に非ず、吾人の靈魂は決して滅絶せざるなり。」

然り、吾人は現世の生滅假象を以て眞義に於ける生滅變轉なりと思考する能はざること前述の如し。我等唯一意深き不滅の信仰によりて神と和き天地萬有と合致し「死せむが爲に生くるにあらずして眞に生きむが爲に死せむ」ことを要す。貴き死は之れ永生の門出、死するに怯なるものは必ずや生くるも尚怯なるもの也、「命あつての物種主義」あゝ何等卑劣憶病の言辭ぞ、人子の心靈を侮辱するの甚だしきものと謂べき也。あゝ人各々「死すべき時に死せざれば死にまさる恥辱苦痛ある」こと古人の言の如し。邦家君王の爲に身を殺したる楠公は一國一君を活かしたると同時に千餘年の今日尚同胞四千萬の胸に躍如として活動しつゝあるなり。萬邦人類の罪過を贖ひ眞の熱愛を以て十字架上に一命を捧げ給ひしエスキリストは二千餘年の今日なほ活然として萬邦人類の胸裡に生き給へるに非ずや。嗟呼小我を殺して大我の御胸に融和し合致し心身一體となるの與樂は果して幾何ぞ。あゝ我等に献身奉仕の一念ありて始めて苦き醉生夢死の境涯を脱却し得べき也。

さるにても眞の生命に入らむが爲に從容死地に就き得るの人は世にも稀なる勇士なるかな。(完)

ホール博士を懐ふ

一夜鉅星亞米利加の廣野に落ちて穹窿爲に陰闇靜寂たり。あゝ彌生二十三日、何ぞ天日の物あはれなる。かくて新紙は忽然としてチャールス、カズバルト、ホール博士逝去の悲報を齎せり。吾人深く米國民の爲に之を惜むと同時に衷心基督教界の爲に痛哭せざるを得ず。

博士資性溫良能く人を容る。偉然たる體軀、溫乎たる風貌、人をして自ら靄々たる和風に薫せしむるもの

あり。氏や一千八百五十二年紐育市の一街に呱々の聲を揚げしよりウヰリアム大學に進み、ロンドン、エデインバルフ等の大學に神學を修め千八百九十七年九月紐育ユニオン神學校長の職に推され爾來十有餘年、孜々として其の局に當り靈界の開拓に盡力せられしが天(てん)齡(よわい)を此の偉人の上にかさず、今や忽然去て不歸の客となる。吾人東海の一異客、すゞろ此の悲報に接して痛惜哀悼の情を禁ずる能はず。

　鴻峯、袖井園氏ホール博士に就て語て曰「氏や眞に人格の人、品性の人なり、其の思想其の言語、著しく英國風あるはロンドン、エヂィボルフ在學の賜なるべし。昨春早稻田大學の講演を終えて北海巡遊の爲め夜行の汽車に搭ぜられしが、不幸にも寢臺なく食堂に空室なく爲に翌日晝すぐる頃まで食せず眠らず僅に仙臺に休息せられ早急本國に歸られき。印度布教に於てさらでも疲れし體軀は此の不幸の爲めいたく健康を損したるものゝ如し……」

　噫、明治四十年三月二十日、今より思へば是ぞ余が此の靈界偉人の面容に接したる最始にして最終の一日なりしなり。獨り机邊に倚り靜かに講演當時の日記を繙けば、すゞろに温平たる風貌、魏然たる容姿を眼前(めさき)に認むる心地して感想轉切(かんさうてんせつ)なるものあり。余は當時日記の中より左の一節を拔いて博士追悼の辭に代へなむかな。

* * * * *

　時は三月二十日。午後五時、シー、シーホール博士の「自制の大」Greatnss of Self Conrtal てふ痛快なる講演ありき。所は早稻田大學の大講堂。

　堂に入れば聽衆千餘。餘軍なほ陸續として押し寄せ來むず悽しさ。定めの時刻となるや、高田學長は先づ壇に上りてホール博士が紐育ユニオン神學校長として今名嘖々たること、極めて繁忙中にも係らず本大學生の爲に一時間餘の講演を快諾せられたること、今夕七時半上野發の列車にて北海巡遊の途に就かるゝことなどを述べて簡單に紹介の辭を述べられぬ。次て壇に立ちたるは鼠色の頭髮、黒地のオーバーコートを着たる

五十六七の一紳士、魁偉なる體軀を動かし沈靜の低音を以て「此處に集まれる諸君は最も幸福な方々である」といふ一話を前提にして「人は自己の修練せるセルフコンツロールを働かすに非ずむば完全なる人格の人となる能はず」てふ中心問題に進むや沈み勝なる低音はいつしか光艶の氣を帶び一句は一句より勇壯に活躍し來りて壯眞の態度と巧妙なるチエスチュアーとは著しく聽者の膽を奪ひぬ。其の一度セルフの語句を強く響かするや、胸邊兩手を靜置して時に禮拜の態度を取り。

「神は吾人に極美の感情を下し給へり。吾等は明かに自己を分析するの機能を有す。神は畢竟セルフの純化美化したるものにあらざるなきか。モーラルの美、感情の高潔、之完美の光、圓滿の美……」

眼は天上に走り兩手は靜かに胸間に落つ。縱橫の辯滑脫の風、美妙の聲調聽くものをしてすゞろに其高潔偉大の感に打たれしむ。中央來賓席の椅子に倚りかゝりし高田博士は此の巧妙崇美の態度に眼を見張つて何となうあつけにとられたる樣子、優しき微笑を洩らせる姉崎博士は我意を得たりと云はむばかりの面持、溫厚肥滿の安部講師は瞑目一語一句聞き餘さじと分析解剖に勉めつゝある態度、聽衆水を打ちたらむ如く、さしも多人數なりし學生席もたゞや靜寂深々たり。斯くて一時間の講演終れは博士は頰邊に崩るゝばかりの微笑を浮べて、

「私はこれから北海道の寒い所にまゐりますするので矢庭に此のオーバーコートをおごり、ポルスの大部分を支出してしまいました。私は心より今日暫らくの會合を喜ぶと同時に、此の樂しい講演は永らく記臆に殘つて忘れられまいと信じます……」

柏手雨の如く學生席よりは何處ともなく萬歲の聲起りて此の靈界の一偉人を祝福せり。博士は一々丁寧なる會釋を殘して場を退かれぬ。室內電燈の光りほの暗うして夜氣轉た膚身に徹す。あゝ樂しかりし此の刹那の集ひ……思へは是ぞ最始最終の會合なりし也。一陽周る東亞の天地、花は去年の色を見せ、落花は風雨に

そが家路を急ぐ。あゝ四月の半は吾人は圖らずも此の悲報に接して轉々追懐の情切なるものあるを覺ゆ。

思へば當時我は消すべからざる强度のイムプレッションに打たれて心情俄かに廣大したるかを疑ひし一人なりき。あはれ眞に人を勇壯强健ならしたるものは身肉體軀の末に非ずして一に心情意思の修錬にあり。一度偉大なる人格の感應あらむか、我が情緒我が胸裡、心身共に勇奮活躍し來りて一種消すべからざるパワーとエキスパンションとを感受するを疑はず、然なり眞乎偉人の力、至高純美の大界に翱翔して一點淸爽高雅の氣に觸れしむるもの、嗟呼是れ偉大なる人格の感應なるかな。謹て博士の永眠を吊す。

噫、明治靈界の偉人津田仙翁逝く

吾人は先きにチャールス、カズバルト、ホール博士の死を吊ひて幾何もあらず、今又明治靈界の先達津田仙翁を哭するのやむなきに至りぬ。

あゝ生といひ死といふ元是れ人界些末のこと、天なる神の御眼には生死なく老若なく貴賤一體上下一位なるへきも、吾人は今眼前此の悲報に接するに及てすゞろ痛哭哀悼の涙禁じ難きものあり。あゝ我等何ぞ無明の境致を脱する能はざるものか。

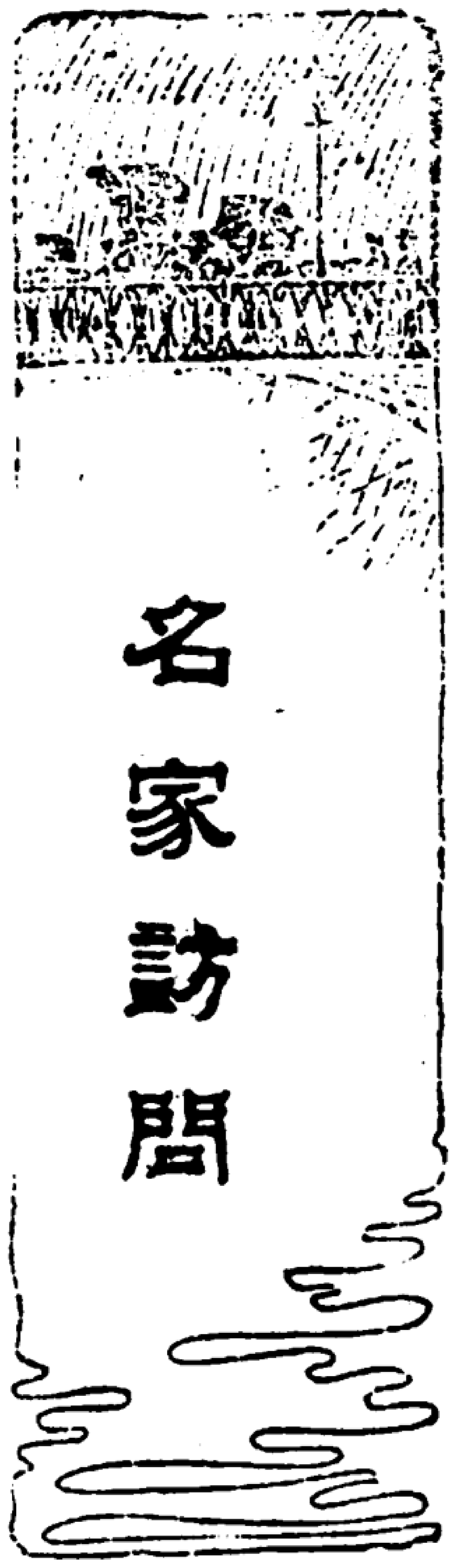
翁の生涯――農學者として明治文明の先達者(パイオニア)として將又熱誠なるクリスチャンとしての經歷に就ては、新紙の競ふて報導せし所なるを以て、此に再錄するの恐をなさゞるべし。然も一事吾人の切に感動追慕の念禁じ能はざるもの、其の終焉の如何にも靜穩水の如く眞に使徒的平和の永眠なりしこと是也。聞く所に依れば「津田氏の乘りしは三等列車の最後部にして他に十數名の乘客あり、一隅には車掌も乘込み居りしが苦悶の聲さへ聞えざりしより急遽の變ありしとは元より知る人なく汽車の横須賀驛に着きし時、大兵肥滿の一紳士が凭れ木に倚りかゝりしまゝ降りむともせず熟睡の體なり。車掌は職掌柄とて靜かに進み寄りて注意を與へ

たるも更に返答なきより肩へ手を當て搖動(ゆりうご)かし見たるに斯はそも如何に、翁は既に息絶えたる後にて施すべき術(すべ)もなく、切(しき)りに混雜を極めおる中、鎌倉驛よりの返答に接し始めて津田氏なることと判明し手續の上遺骸は即夜松葉が谷の別莊に移されたり」となり、あゝ眠るが如き大往生とは斯かる臨終をや云ふなるべし、

天は常に英才豪邁の士を永く地上の穢土に置くを欲せず。早急急電を以て神の聖座に喚び戻さむと力むるものゝ如し。然も翁や必すしも早世なりと云ふべからず。一方明治文明の開拓者として他方靈界の重鎭として地上天界共になすべきの力を盡したるもの、其の臨終の靜寂、平穩なる正に至當の事のみ。あゝ神の偉大なる聖旨なくして如何で此の至美の大恩寵あらむや。

吾人窃に翁の經歴終焉を聞くに及て、すゞろ三田の聖人福澤雪池翁を想起せすむばあらず。然り是れ明治の二大平民、二大偉傑也。眼を上くれば落花繽紛として東都は今や青葉の裡に包まれむとす。知らず、新綠滴る青山の墓地、杜鵑血に鳴く晩春初夏の夜半、靜に悠久平穩の眠りに入れる翁の夢路や今果して如何！謹て翁の逝去を弔す。(四月二十九日櫻喬生稿)

宗教は感應也。然して感應は悲哀より來る。感應道交なくして一切の宗教はあらず。悟とは畢竟神人離隔の悲哀に打ち勝ちて之を超越したる刹那の意義に非すや。人生の偉大は此の世界大の悲哀に觸るゝに在り。吾人が神に對して打ち灑く祈りの涙、世に是れ程深奧なる詩と實在とを一にしたる高調の涙あるべしや。吾等は此の涙に依りて神を見、自矜自大の小我見を解脱するを得る也。



婦人禮法の表裏

新渡戸稲造氏談

暖かい五月九日の土曜日新渡戸博士を一高の校長室に訪ふた。上野で電車を降りて時計を見るとまだ十一時までには三四十分間も餘祐がありさうなので上野公園の新緑滴る樹陰を傳ふて不忍の池畔を北へ彌生町から櫻井塾の角をまわつて、裏門を抜けて一高のグラウンドにはいつてみた。すると十時の授業がまだ終えないと見えて白巻の帽子質純な洋裝兒は今し熱心に兵式體操を試つて居る所であつた。あたり一面には嫩草綠毛を布きつめて蒲公英の黄花今を盛りと咲き揃ふて居る。受付の方へまわつて刺を通すると暫らくにして小使さんが來てこちらへと案内する。之と交代に可愛らしいボーイが出て來て僕を校長室の一隅へと導いた呉れた。

室は廣いが總て質純で單素であるのは飽く迄も一高氣質の一端を示して非常に快感を與えた。室の西南一脚のデスクを前に安樂椅子に凭れて黑のガウンに眼鏡を光らして居る温雅の一紳士……是ぞ新渡戸博士其人なのだ。初面の挨拶がすむと早速例の隔てなき笑話が始まる。傍には丁度來合して居た統計局の一屬官が居る。之もニヤ々と打ちくつろいで笑つて居る。折柄會計の事務員がきて校長の校印を求める。先生例に依て滑稽を云つて笑はして居られる。なべて之れ平和な長閑やかな春の御園である。十分も立つたかと思ふ時分例の屬官は歸つて行つた。後は愈僕の番！何か御高話を……　との求めに應じて博士はやをらイージーチニヤに仰向になりながら「サア何が宜からう」と暫らくは默想の體……一秒二秒……五回もセカンドの針がまわつたかと思ふ頃「では禮儀作法のことでも少し話してみましようかね」といつて靜々と話の幕を切ら

れた其の大要をかいつまむでみると先づ斯うである。

英國にカルテシーリーダー Courtesy Reader と云ふものがあるが其れは禮儀作法に就て何かと注意し教訓を蒐れて居る讀本である。或る時佛蘭西の一婦人が之を見て成る程英國人は Courtesy はあるが Mannerless だと云つたさうである。思ふに英國の社會は事實として上下共に極めて深切で厚意を以て迎へてくれるが然し之を動作の上に表はす禮儀作法などに就ては遺憾ながら充分だとは云へぬ。此等は英國人の缺點として大に注意改良すべき所であるが日本婦人の社會を見渡してみると全然之とは正反對になつているやうに思へる。只禮儀作法の末にのみ走つて其の中心となり生命となるべき誠心誠意を忘れて了つては居らぬか。一體禮儀と云ひ作法など云ふものは何も機械的人形的のものではなく衷心の誠情熱意を示す一表現に過ぎないものであるから、出來得るだけ其の表現たる禮儀作法を丁寧に優美に上品に表はさねばならぬ。と云つても其の生命たるべき肝心の誠を失つては何の用をもなさぬ。のみならず全然無意味のものとなつてしまふ。例へば同じく客に對して座るにしても、單に手をつき端座しているのみではなく。何處か腹部に力を入れるとか口を緘むで威儼を保つとかいふ具合で內心に於て確乎たる一種の力を要するのである。私は成るべく婦人女子たる方々が、此の禮儀作法を充分に御研究なさるやうに希望するのであるが、其れと同時に又精神的に內心的に心より熱情を以て他人に接し應待するの習慣をつけるやうに希望むで置きたいのであります。

私は嘗て方々日本の寄宿舍を見て歩いたことがあるが、成る程婦人方の寄宿舍には塵一本もない。机の上なども常に整然として實に立派である。が然し私は何となく是丈では物足りないやうな不滿足な感じがしてならぬ。といふのは第一に床の間が附いて居ない、佛壇が設けられて居ない、神樣が祭られて居ない。然し神佛を祭れと申しますと何だか線香を焚いて念佛でも唱へよといふやうに聞えるけれども、私の眞意は決して或る一種の宗教を強制的におしつけるといふわけで

はありませぬ。のみならず佛壇を設け神を祭るなどいふことは今の寄宿舍制度では出來兼ねるとしても床の間だけは是非設けて置きたいと思ふ。何も米僊や雪舟應擧などの書畫を掲げなくとも宜しい。父母の寫眞でも安置して置いたら各自精神的修養の上に如何程大なる功果があるだらうか。同じ室、同じ居間でも床の間があつて自分の傍近く父が居り母が居ますといふ感念があつたなら同じく友人と笑話をするにしても自然其の方に向うやうになるし、冗談一ッいふにしても餘り濫りがわしきことを避けるといふやうになる。で私は是非寄宿舍などには粗末でも宜いから床の間だけは是非設けて置きたいものと思つて居る。

又食事中は必ず感謝の祈禱を怠らないやうに願ひたいものです。私は何方かと申すと寧ろ形式的と咀はれても祈禱の詞は口づから唱ふるやうにしたいのです。默禱も至極結構だが、仲々旨くいかないものです。で食堂を開く時分には舍監の方なり主立つた人なりが起立して祈禱を捧げるといふやうにしたい。私の家庭ですか？はゝ私の家では實は默禱にして居るのです。小供などにはまあ何でも宜いから一寸の間頭を下げて居よといつて置く。――此の副食物は旨さうだなあ。今日は昨日よりか御馳走のやうだ。おゝ嬉しい早く喰べてみたい――小供心には之だけでも結構です。只私は此の食前の祈禱――一種の禮法に依て眞に美しい感謝の誠情を發揚してゆきたいものだと思ふ。行くゆくは兒女の母となり家庭の女王ともなるべき婦人女子の方が、此の料理は鹽つ辛い、拙くて喰べぬ……：などゝ小言を言つてるやうでは迚も駄目です。

鹽辛ければ甘くするが好い。甘ければ辛くするが宜い。が然し是に向て小言を弁べるやうなそんな野卑な、さもしい考へなどは一切すてゝしまつて誠心より感謝と喜びとを以て食卓につくことが出來るやう勉めて貰ひたいと思ひます。

床の間のことに食事の注意……さう都合が宜いからも一ッ話して三ッにして置きましよう。といふのは鏡のことです。鏡は昔から婦人の寶といつてあります

が婦人諸姉が懐中鏡など持つて居るのは甚だ以て宜しくない。各自姿を見るのは何も耻ではありませぬ。髪の亂れ衣服の着なしの亂雑　……其れこそ大なる耻辱です、失禮てす。だから鏡に對して各自の姿を映すのは決して耻ではありませぬ。宜しく公々然と鏡に對して容姿を正すべきである、で私は寄宿舍なら玄關が廊下などに大鏡を据え付けて置きたいと思ひます。(記者云ふ新渡戸博士の邸宅は小日向臺の緑陰風清き一角に建つて居るが玄關のドアを押すと直ぐ眞正面に隋圓形の奇麗な中形の鏡が一臺据えられてある。で來訪の人々は厭でも自分の姿を寫さずにはおれない。其の左側が應接室になつて居る。博士の注意周到なる此の一事を見ても察知せられると思ふ）そして此の大鏡に對して總ての生徒が公然と姿を正すやうにしたいのである。陰微の中コッソリと姿見をやることなどは百害あつて一利なし。コッソリといふ文字の中に既に業に恐るべき弊害が潛むで居る。婦人女子たる方々は出來得る限り此のコッソリ主義を打破して天に耻ぢず地に耻ぢない、美しい婦人の美德を發揚することに勉めて貰ひたい。(文責在記者)





宗教と衣服

柏井生

基督教の精神理想は日常生活の上に實現せらるべきものなり。道に志すこと篤き人は衣食住の三者につきて世人と一樣の考を有するに滿足せずして、其の改良進歩に工夫を用ふるを要す。されとこの一文の主意はかゝる方面を說くにあらずして、聖書の中宗教を衣服に譬へたる言に就きて少しく考ふる所あらんとす。

パウロ曰く『唯汝等主イエスキリストを衣よ』(羅馬書十三〇十四)と。又曰く『凡そバプテスマを受けてキリストに入れる汝等はキリストを衣たるものなればなり』(加拉太書四〇二十七)と。いづれもキリストを衣に比へたる者也。知らずキリストと衣服と何の似たる所かある。

(一)　諸の生物のうち衣服を要するものはただ人類あるのみなり。蝶はその羽を以て、鳥はその羽毛を以て獸は其の皮を以て自から美なり。人は他の材料を以て衣服を作り之を纏ふことによりて初めて美なり、是の故にカーライルは人の定義を下して衣服を着る動物なりと云へりと記憶す。默示錄著者は『己が裸體の恥の露れざらんが爲に白き衣を買ひて纏へ又見ることを得ん爲に目藥を買ひて目に塗れ』(三〇十八)と云へり。人は裸體の恥の露れざらん爲に衣を纏ひ生れつきのまゝなる心を修め之を包み隱さんか爲に基督を着るなり。パウロ云へり『體のうち尊からずと思ふ所に物を纏ふて我等殊に之を尊ふも之に因りて我等の美しからざる所はすぐれて美しくなるなり。我等の美しき處は心を用ふるに及ばず、神は其の劣れる所に殊に尊美を如へて身を調へたまへり』(哥前十二〇二十三二十四)。人間世界の弱き處、汚れたる處を強くし清くする

は基督の精神なり。基督の精神によりて家を治むる主婦は表座敷や玄關を清潔にすると同しく、臺處物置をも清潔にすべし。外國にては煉瓦にて建てたる家にても不潔になり易き部分には大理石を用ひたるを多く見たり。衣服も亦然り外部に美しく派手やかなる裝をせんよりは先づ肌に着きたる處に清潔にて垢つかざるものを着くるこそ奥床しかるべけれ心靈の衣も亦然り。人の最も表すを好まさる所、即ち心に潜みたる罪に手を着けて之を清くし美しくするこれキリストの使命なり。布伯來語の罪を贖ふと云ふ言葉は原は迫むもしくは掩ふの意なり。汚れたる我が心はこのまゝにてはとても聖なる神の御前に出つべくもあらずたゞ清く罪無きキリストの中に包まれてこそ初めて神の前に出つるを得るなれ。

(二)　衣服を清く正しくするは心を清く正しくせんがためなり。浴衣を着たる時と禮服を着けたる時とは心持自から異なるものなり。我等は浴衣を着て海水浴に行くが如き心持にてこの人生に處すへきか、將た禮服を着けて帝王の宮に出入するが如き態度を以てこの再び享け難き一生を送るべきか。キリストは「汝等腰に帶し燈火をともして居れ」(路加十二〇三十五)と云へり。心に謹みあるべきを云へるなり。又馬太傳二十二〇十一以下を讀まば婚筵の譬喩の一部分として、王一人の禮服を着けさる客を罰せることを語り給へるを見るべし。我等キリストの如き謹み深く謙りたる精神の態度を以て世に處す。これ即ちキリストを衣たるものなり。イエスに復活し給ふ時屍を裹みし布と頭を裹みし手巾と別にして疊み置けりとあり(ヨハネ傳二十〇六七)この一小事以てイエスの謹深かりしを見るに足れり。キリストを衣るはこの精神を衣るなり。

(三)　衣服は單に身を飾らんが爲のみならず又心を正しくせんか爲のみならず、事を爲さんがためなり。羽織袴にては戰爭はなし得可らず。日本人が不格好なる衣服を着くるは活潑なる業務を執るに之れあらざれば不便なればなり宗教は美術なるのみならず、衣服なるのみならず併せて又武裝なり。「汝等惡魔の奸計を禦かん

爲に神の武具を以て裝ふべし。我等は血肉を戰ふに非す政又權成又この世の暗きを宰る者又天の處にある惡の靈と戰ふなり』（エペソ書六〇十二）『我等暗き行をすてて光明の甲を着るべし』（羅馬五十三〇十二）。美術的裝飾をせんためには他の宗敎や哲學も用を爲さん然れども罪惡の力――我が心中にある罪我が家にある罪社會に橫行せる罪の勢力と戰ふ武裝として着すべきものイエスキリストの外にこれあるべきや。

○せちは

五月にしくはなし、さうぶよもぎなどのかをりあひたるもいみじうをかし。こゝのへの內を始めて、いひしらぬたみの住家まで、いかでわがもとにしげくふかんとふきわたしたる、猶いとめづらし。

（枕草子）

文藝

水の精（第四回）

辻村靖子譯

（譯者の申込に依り本號より題目を「水の精」と改めたり）

私は外國から旅行してこの市街についたのが恰一週間まへ、

ふと知る人になつた美人はさる身分のある人の女て、擧動言語がいかにも品位のある優美な人。どうか末長く交際いたいと思つて、夫から私も遠慮なくものいへば、彼女からも疎からず仕向けて呉れたゝ遂々しまひに私から結婚のことをほのめかすと、婦人は何と思つたか

「夫なら私も貴郎をみこんで、一つ探險して戴きたい所があります。往昔から魔所と云ふて、ついに人の入

つたことの無い暗黒の森林を、通過りすぎて探險して栞をしてかへつていたゞきたいのです。そうしたら交際社會でもどれ程貴郎を畏敬ますか、私も亦同じやうに賞揚られて、どれほど肩身が廣いでしやう。
私も夫に煽動てらるゝてもないか、云かけられてみれは辭むのも殘念、だとは如何なる所でも行つて行かれぬ所があるものかと、詰らぬ意氣張も好奇心もてゝ別に其婦人に契約もせぬが、單騎で森林へは入つたのかあの御厄介になりにきた日の前日でした。
少女は突如に口をだして、
「其婦人は貴郎を愛していらしつたのネ、夫に其愛してる人を、魔の森林にやるなど〻、其人は眞個に馬鹿な人だ」。ませたことを云ひました。
客は其答はせず、あとを談話しつゞけるのです。朝早くのこと、私は乘馬で出かけたのです。あの通り、天氣はよし、木の葉の薫りのする空を仰ぎ、若草をふんで出かけた心地は何ともいへず晴々して、此超自然な仙境は、なぜ人が恐れて來ぬのであらう。何故に魔所など〻忌はしい名をつけたのだらう。多分之は迷信の深い、未開の人が云ならはしたまゝて、今にそんな名が立つて居るのに相違ない。可し〳〵、自分が見屆けて、奥の奥まで一廻して、かへつて世間の人を笑つてやらう。
こんな考へで猶進んで行くと、いつか往くては徑のない大森林に入つてたのです。そうして後を見れは、波濤のやうに幾疊重みえた平原も高阜も、更に見えなくなつてしまつた、はて不思議、さあ森林に迷ふと云ふ危險は之を云ふのか知らんと、呆れはて〻、佇立つて居ると日が暮れたのでもない、霧がたつたのでもなくて、あたりは一面灰のやうに暗黒くなつた、するとつい頭の上にさして〻ゐる、幾抱かありさうな樫の上て、がさがさと云ふ音響がした。はてとふり仰いてみると、黒い塊の蠢めくのかみえる。「は〻あ熊だな」と思つて、ピストルに銃丸めして、みかまへすると、すく頭の上て、
「彼の枝も嚙み切らう、此條枝も叩き折らう。そうし

て折角の御馳走と、甘く今夜烹て食はうか、」鍛かれた音聲で云ひながら、グラ〳〵と笑つて、條枝をゆさゆさ撓ませたか、電のやうな早さて忽影が見えなくなつて仕舞つた。私は領元から水を灌けられるやうにぞつとしたか、馬は夫よりも悸えて棹立に立つたのてす。危くすかりついた主人を乘せて、一目散に駈だしたのてす。」

「もうもう澤山、あとはきかずと理解つて居ます。」

好人物の老爺さんは、手をふつて止めるのに、少女は談話しか氣に入つて、ころげるほとの大よろこひ、膝をすゝめて

「夫から? 夫から貴郎とうしたの?」

「宛然狂氣のやうになつた馬は、藪も徑も見境はない、偏木ても岩てもふみこえたり、蹴とはしたりして、驀進に駈け出した。とこまて行つたら止るやら白泡を噛んて油汗を流して、息たはしけに狂ひまはつて居る。騎しづめやうと思つても騎りしつめられない、數刻の恐怖と疲勞とて、身體も心も綿のやうになつてとこをとう來たか夢中てあつたのてす。すると行く手にすつくりと立つたは、背の高い純白の衣を着けた人て、夫か影のやうに馬の鼻のさきに立つと、夫ほとにたけり狂つた馬か、たぢたちと道止したのてす、そこて自分はほつと一息ついて、徐に馬を乘り鎮めて、睛を定めて其白い衣とみると、何のこと、樹蔭に咽ひ流れて居る、美くしい溪河てはないか、

少女は罪なく打笑だか、兩親は物辛そうに、何か考へに沈み入つて居る、

「夫から獨笑ひをして、手綱をとり直して鞍の上に身をかためて、たしかに方面を決定て進まうとすると、馬の前にチョコ〳〵と、徽擽く蠢くものかあるのだはてと思つて、猶よく注視ると小さい小さい一寸法師。だ是つ許りの……一

翁は聽いて居られないで、思はす面をそむけたのです。

「また其顏の醜いことは、まるてパフムの畫にありそうなので、色は銹色をして、鼻と口とか馬鹿に大い、

殆と顔面中鼻計りにみえる。にや〳〵と笑ひかけて、ぺこ〳〵頭を叩けるては無いか、私は恐いと云はうより、胸か悪くなつて、物も云はすに、馬を引きかへそうとするか、馬はぶる〳〵ふるえて立すくみになつて動かぬ。夫から、鞭て無二無三に、敲いて馳たした、其早さと云ものは全速力てとんたのたすると、彼奴め。其小い身て夫と同速力て、追かけて來やがる。そこでふりかへつて大喝一聲退け、

「退け、退かぬか己れ、愚圖愚圖すると踏みとばすぞ、蹴とはすか可いかい？」

「は…………、踏みつぶせるなら潰して見なさい。夫よりか私に茶代を置いて行かしやれ、茶代を、禮を置いて行かれざあ、通行ることはなるまいが？」

太い音聲て、うな　か如くに叫ぶのてす。

こんな奴と口をきくのも可厭たか、我慢して、

「何禮？、貴様に何をして貰つのたのさ？」

「へゝもう今迄のしことを忘れさしつたの、若私か此所て饗ひ止めなんたら、其馬諸共彼の崖下へ、眞逆さまに墜落ちたゝらうが」

「えゝもう何も云ふすには及はん。金か欲しけれあ投與ふ。退け！貴様にやる理由はないか、五月蠅いからやる退け、」

恁云なから財布の紐をといて、若干か知らす金貨を握んて馬の上から投りつけた。そうとすると彼奴、如才なく帽子と持つて受けたやうたつた、此方は委細構はすに、馬をはやめて行かうとすると、また追ひかけて來る足音かする。顧盼つてみると其歩行ざまか彈子を投けると云ふか、横に轉けると云ふか、不快な中にも其滑稽さに、思はす笑を禁し得なかつた。いかにも走るか苦しそうて、一足ことに身體から肩を動ぶりながら、高く頭の上て金貨をさしあけて、太い音聲て喘ぎ喘ぎ、

「にせ金だ、！にせ金だ！」こう云つて叫んたのてす。

「私はむつとして、馬を止めさま、

「何？私の投つたのか衒金！云かゝりを云ふな」

其内彼は追ついて、不倒翁やうな身體を反かへつて、

「にせ金だ、や眞正のでも金は御免た。金なんか有餘る程有つて居るのだ。虚言と思ふなら今みせて上ける。」

云ふとひとしく其邊が、眞晝のやうに明るくなつて、宛然佐渡の金塊のパノラマをみる通りな鑛穴があつて、燦然した黄金が、道路も狹いほどにこぼれて居る。其中に此一寸法師と、同じやうな、小人島が、大勢居て其黄金を、量つて見たり、散して見たり、そこに今の醜いのか、子供が玉川の砂利を玩弄にするやうに餘念なく戯れて居る。多忙しそうに駈込んで、何か箕のやうな物を有つて來て、黄金を一杯盛て、農夫が小麥を運ぶときのやうに、肩に負擔つて、うむ〳〵と息をはづませて持つて來るのです。すると其豆のやうな人達も、同じやうに一齊に、そろそろついて何かわやゝわや云ながら、向つて來る氣味悪さ。

何處へ向つて馬を走らさうと、思案するまもなくもうバラ〳〵と側へ來て、宛然大木へ、蟬の取ついたやうに、馬の後足にとりついたり、鐙に吊下つたりするのです。生やさしくふり拂はうとした位では、恐ろしい、魔力をもつて居て、動けそうにもしないのです。

私も馬も夢中になつて、どこを當度と云ふことなしに、只眞暗な森林の中を狂ひに狂ひあるいた幸ひと追かけて來る容子も無し、夢中で四五町も遁げ延びて、後を振りかへつて見た時には、もう金山もなければ穴もなし。日はとつぷりと暮れはてた、方角も知れぬ森林の中で、まことに進退谷まつたのです。加之すこし氣が弛むと、身體はもう馬の上に堪えられぬほど疲勞れて、激しく發汗した。其あとの寒さは、枝元から水を注かるゝやうに、戰々ふるひがてるのです。雖然躊躇して居つて、こゝで行き暮たら大變、よわり果てた氣を勵まして、谿河の音をたよりに出かけると前も見た。烟のやうな霧のやうな白衣人が、絶えず馬の頭のところにちらついて來るのです、みまいと思つて目を塞いでも、矢張り眼の中にちらつくやうな心地がする。そこで私も度胸をすえて馬の横腹を強くしめると一聲高く嘶いて躍り狂つて　前足をあげて、其白衣

い物に突きかゝつた。すると怪物が消えるとひとしく、まるで水を浴せられたやうに、顔も衣服もぞつくりになつたのです。夫て其白い怪物が消えたかと思ふと、依然一間と離れぬ所にたつて、來々をするやうに、大きくうなづいて居る其姿が、森をでるまでは、馬の頭を離れなかつたのです。

暗黒な森林の端から、白き衣を引いたやうな湖水がみえた時は、蘇生つたやうでしたよ。加之に貴爺をみたときは、私あ親よりなつかしかつた。

や、來るときはそう云億劫な目にあつて來たのだが、歸る時にはどうするか、」

靜肅にして聽いて居た兩親はおはなしが結末なので、ほつと息を吐いて、

「どうもとんだ目にお遇なすつたので、俺もどうてそんなことだらうと思ひましたよ。」云ふたまゝ三人しばらく無言であるのに、少女は何と思つてか、クスリ〳〵と笑ふのです。客は故意と、六づかしい顔をして見せて、

「貴女何が可笑しくて面白そうに笑ひなさる？」

「だつて貴郎、かへる時にはどうするかつて、歸れると思つてるから可笑しい。どうしたつて歸れませんよ。まあ虚言と思ふなら、馬に乗るなりと船にのるなりとどつちでも、勝手にやつてごらんなさい。舟で行かうとすれば彼の激流でしやう馬でいかうとすれば今のやうな目にあふでしやう、どうしたつて駄目ですよ。いつまでもこゝに居らつしやい、夫が一番です。」

克ほこつたと云ふ顔で、にこ〳〵と笑ふのが、憎いながら美くしいのです。まことに此小女の云ふ通に、今かへらうとするのは非常に危險で、しかも幾多の困難があるのです。

*　　*　　*　　*　　*

どうもお天氣模やうが悪く、暴もやうで風も吹きすさめば雨も止まぬ。森の樹木は吹萎れ、瀬音の石を轉ばすのもきこえて、今し此小舍は吹とばされるか、河なみに洗ひ去らるゝのかと思ふたこと屢でした。夫ても幸に暴風雨は收り、今日は珍らしい日かけをみま

しなので。漁爺さんもぼつぼつと復漁の仕度をすれは媼さんも久しぶりて、汚れた衣を盥につけたり、黴臭ひ物を日光に乾などして居ります。

客はこゝに根が生えたのです。何かそんなに引とめたかといへは無論森林の路のわるい理由もあり、湖水が荒れて船がだせぬのには相違ないが、夫よりもつと力のあるのは、此少女に妙に心が止つて、離れてかへるに忍びぬのでした。老爺老媼は氣の温和な人で。「まあ體力のしつかりするまて、十日でも廿日でも、遠慮なくござれ。」と云ふのを好い潮に、中々歸らろうとしませんでした。

そこで往古、老親さんが使つてた、久しく不用になつて居たのを持ちだして、覺えの手練て小鳥を射たり、鴫をとつたりして意氣揚々と歸つて來ると、少女は喜悦ぶかと思の外、美くしい蛾眉をひそめて。

「あゝ可愛そふに、貴郎餘りぢやありませんか、今まて大空を飛び翔つたり、池の水に潜つたりして、餘念なく樂しんて遊んで居たのに、夫にこんなに射殺してしまつて、ほんとに貴郎むごい人ですね……」

吐息をついて怨めしげに云ふのである。そうかと思ふと獲物がなくつて、空手で悄々かへつてくると、無遠慮にもつけつげと、

「貴郎下手ネ。弓を射ることは、小禽の方が敏捷いのに、貴郎遲鈍からだゝから、不可ない。私折角待つてたのに、今夜も無味いお菜許り、私夕飯は可厭だ。」

などゝ理解らない我儘を云つて執拗るのですが、可笑いのは其我まゝは僅の間て、逆らへは手におへぬか、避けて通せば、あとできつと後悔して、可笑しいほど從順になるのです。こう云ふ氣性と客はすつかりのみこんで、いくらつけつけと云はれても、別に腹を立てもせねは不興にも思はぬ。まして此老人夫婦は、二人の兄より妹より、もつとし親しげに隔のないのをみて、

「あゝ不思議の緣て好い婿殿をとつたものだ、たつた一粒種のかけかへない大事の女に、たとへ鐵の草鞋てさがしたからつて、あんな男らしい柔しげな婿があ

るかよ。よしあつたにせいこんな貧乏世帯に、どこの誰が來て呉べい。

「それ所ぢやあ無い、私も重荷を下したやうだあ」

など〻二人とも莞爾々々して擧るのです。客もいつか此少女をのけて、世界に自分が愛を分つ人は又と一人もないもの〻やうに、身分も地位も忘れはて〻、もう半月も其上も經過つて居るのに、歸らうとは思ひもよらなかつたのです。

が夫も際限かあつて 寂しい夜半に夢の醒めた時や、時雨木の葉かまどをうつ朝などに、は故さとのことか夫から夫へと連に想ひだされるのでした。さあそうすると屋後のそまやで、愛馬の芻を囓む音をきいても、納戸に吊した劍や鞭を見ても、一々望郷の念がわいて、もう一分時もかうしては居られない多大に爲ることのある自分だと蹶起するのでした。そうする下からすぐ心にか〻るのは、起てもさめても忘られぬ少女、捨て難い少女、彼女は一體、自分を何と思つて居るだらう。自分ほど熱中せずとも、たゞ憎からず思つてさへ呉れ〻ば夫で可い。老夫婦の許可を得て、連てかへつて我妻にして、幸福の世を送らせるに、何の至難しいことがあらう。たとへ生れはどうであらうか、彼ほどの美貌と、品位性質を有つて居る人か、どこにある。一通りの教育として、社會にだせば立派なものだ、きく所から察すると、素性も決して普通の人ではあるまい。萬一としたら、高貴の人の子かも知らぬ。いかにも氣だかい冒されぬ所がある。中々どうして漁夫の子といはる〻やうな、人品で決してない。」

など〻勝手のよい方に判斷をつけて、いろいろとよい工夫を思めぐらして居ました。

ゆく春

秋郎

あはれ我はすてられし身ぞ。戀の片羽をそがれぬれば、琵琶を抱いて一絃神に入らむとの願よりかくもうき身をやつせし身なるぞ。わが戀の物語せよとや。其

は面白の御言葉かな。君よ。この我にも天地の春はめぐりきて幾度か駘蕩の思はありき。

それよ、我は十九の春、はからずもわが戀ふべき人を見出しき。そは誠にみめよき女にはあらざりき。されど其の愛に輝く眼、柔和なる頰のあたり、生命の潑溂たる、生れつきて得たる淸さのあらはれを輝かしたるこそ誠に我が眼を奪ひたるものなれ。また其の女世にも稀なる琴の上手にてありき。夜毎にかなづるしらべに、我や身も世も忘れ果てゝあこがれけるなり。君よわが世にありてはたゞ琴の音こそわが誠の思をよくも語るものなれ。その一絃にふるゝだに我が眞心の千々にくだがれ玉となる心地してえも云はれず心躍るを。またあるときは幾千年の昔を思ひかへしてやるかたなく思ひ入るなり。あはれ琴、琴の音は我が胸の誠をたゝくに似てかなしき響すなり、この琴、誰れ持つとにはあらねど、我が戀へる人の奏で給ふと思へば、ゆかしさなつかしさの思ひ堪へ難うて消え入るばかりなり。聲もほがらかに嚴島詣のくだりを唄ひ給へる一夜、我は思にたへて垣根より狂へる言葉をなしき。其の狂へる言葉我は再び自ら問ひて何を云へりしやを知らず。はたとやみたる琴の音に驚きひそめば、淸樣にあらずやと女の聲す。あはれ我はその一語を暗に抱いて歸りぬ。云ひしらざる喜はそのうちにありき。これより朝夕の逢ふ瀨にはたゞ微笑みかはして胸の思をあはせたりき。

さるに君よ。琴の音はまた聞くべからず。我が戀しき人は我が思をかなでずなりぬ。父なる人の心づけにより北の果なる叔父の許にと送られぬ。我やこの世に戀しき人を失ひたる心地してはしたなく感じ初めき。それより我が家のすまひも心うとく、やがては彼の地なる農學校にや行かむと思ひこめき。かくて我は懊惱し鬱憂に日を暮しにき。語るも耻しや我や戀ふべきものにはあらざりし。男の子と生れて誠の力たらざりき。賴もしからざる男の子なりき。かくてわが誠は人の心に押すべくもあらず。我やよわかりしなり。空想の子なりしなり。現世と戰はんにはあまりにうつくしき

天上界を夢みたりき。これより何處ともなく聞ゆる琴の音はうらめしくもまたねたましきよすがとなり、いたづきの幾月はありて我は遂に女性の琴をすてき。男の子にはふさはしからざるかよわき調よと思ひてこの琵琶をかい抱くやうになりたり。わがこの力なき誠の一念を強うせむとてなり。さはれかの時のことども思ひかへしては味氣なき心も起り彈き破らんず勢の詮方なきを如何にせむ。

あはれ我がこの思は知る人ぞ知らむ。わがこの誠の響を琵琶にあはせて人の心に徹せしめむは畢生の事業なるを。君よ我はその修行にもと思ひて淸見潟なる樗牛の墓に詣でゝ歸れる身なり。今宵の奇遇に樗牛が希臘の女詩人さつぽおを痛める一節をひかなむ。あゝさつぽお、彼は女として戀てふものにあこがれしかど誠なき人は彼を愛し、まことなき愛は彼を惱したりき。僞信天をしたすこの濁世にさつぽおの死や遲かりしと思ひしとき、我や如何に樂しかりしよと樗牛が咏嘆の響に今もなほ胸を同じうする友もあるなれ。あゝさつぽお、人の世には疑惑の團塊ありて永久に誠と誠の相觸れざるぞ悲しき。曾て誠を誓ひてし人を抱けば、胸に蛇ありて死ぬべるかみぬと。あゝこの羽衣の松のほとりに說きたりし天の國こそ慕はしけれ。二千年の昔、天降りけむ天津乙女の天には僞なきものをと伯染が疑をとゞめて舞ひ上りしより人は遂に疑のうちに喜ぶべき身とはなりぬ。僞りの世を樂しむ身とはなりにしなり。思へば果なき世にもあるかな。憂悶のうちに世を去りたる樗牛、我は其の淚によりていかばかり淸められたる、誠なる人生をたどらむとして早世したりし樗牛、我は其の力によりてわがこの誠を傳へんとの一念を堅うせしなり。

思へばはかなき望や戀や殘りなうやれ果てゝたゞ誠の一念ぞ胸を打つなる。愛よ望よ再び歸り來りてわがこの誠のうへに坐せよかし。

さらばこれより彼が掻き出でし高朗の響をかたらなむ。いざ。

（了）

落花集

辻村靖子

落花

ころもてにむつるゝ蝶とおもひしは
　梢はなるゝさくらなりけり。

海邊月

しらま弓いそへの松にこかくれて
　いさよふ月のかけのさやけさ。

五年のほと相馴れてありける學生の業卒へてふるさとへかへりにしのち

鶴の子のすたちていにし朝より
　ねくらさびしきふるの山まつ。

崇徳院の木の丸殿のあとを吊ひまゐらせたるをりに

いにしへのみやゐをとへば千町田の
　きひの葉そよき秋かせのふく。

新妻をうしなひつる人のもとへ

千代ふへき松の若枝をくやしくも
　もしほたく火にたくへはてつる。

さまよへる聖者（承前完結）

ヴァンダイク作
櫻喬生譯

五

げにや歳月の流れゆくばかり速かなるものはあらじ。初めてマギー聖徒たるアルテーバンが一點希望の御光りに打れて懷かしきエグバタナの町を出でしより數ふれば早や三十三年の星霜は果しなき漂浪の中に移り行きて、さしも活達剛强なりし四肢は衰へ、嘗てはゾーグラスの深豁と並び稱せられし彼が頭髮も、冬の木の葉と霜に染み、爛々として火焔の如く燃え上りし眼球も今や餘燼の灰と色は鈍りぬ。

あはれアルテーバンが肉は落ち體は衰へ、疲苦と放浪とに攻められて身は既に底ひなき死の海に臨めりと雖も、王を求め主を拜せんとする一念は鐵石よりも堅

く巡りめぐれる小車の果しなき荒野の旅路を續けて是を最後の訪問と亦もやエルサレムの都を指して踵を返したるは春なほ若き頃なりけり。

是より先き、彼は幾度が此の聖地を訪ひ、群れ立つ茅舎薄暗の牢獄に、過ぎつる日ベツレヘムなる村里を出でゝ危き難を埃及に遁れしナザレの家族を求め歩きしが、遂に一家の姿を拜するの折を得ざりき。然も今一度の旅路に於て終には榮ある成功の光明に接するならんと、希望の一念なほも衰へず胸の奥に深秘の御聲仄かに湧き起るとぞ見えし。

時は逾越節の日なりけり。人々遠近より集ひ來て市は宛然に人の山を築き、遙き御國に難を避けたるイスラエルノ幼年少女も再び此の大祭を祝せんものと宮殿さして押し寄せ來り市は數日の間街道狹しとひしめき合へり。

さはれ此の日此の時奇異なる一群の若者あり。殺伐活躍の氣は何時とはなしに群集の中に閃けるを覺えぬ。仰げば天日隱れて陰闇たる黑雲なびき、すゞろに不祥なる凶厄を豫告するものゝ如し。踏み行く草鞋、沙上を急ぎゆく跣足の音柔かに亂れ響いて幾百千の群集は彼方ダマスカスの關門に連なる一條の大道を東へ、眞一文字に流れ下る。

アルテーバンは此の尊き祭りに列せんものをと、敬虔の焰一筋に、パルシアより遙々此の地に集ひ來れる自國民の一群に從ひ、靜かに此の騷ぎの始末と行先きとを問ひ尋ねぬ。

人々口早に答ふらく、

『吾等は今し城外なるゴルゴタの地に向へる也。此處には今しも死刑の執行ありとぞ聞く、御身は未だ其の顚末を知り給はざるや、二人の兇惡なる盜人は今し十字架に釘けられ、是と共にナザレのイエスと呼びて愚民賤夫と交り種々不可思議の業を演じては無知の民を惑はせしが自ら神の子なりと標榜せし科に依りて長老僧徒の忌に觸れピラトはイエスに十字架を負はせて今や共々死に行はんとはする也……』

あはれ三十三年の星霜を、あらぬ異郷に踏み迷ふて

唯一意猶太人の王たるイエスを拜せんと憧れ望みしアルテーバンが身にとりては、此の一語こそは實に晴天の霹靂なりし也。彼が疲れ果てたる心の緒琴は如何ばかり急激の調を發したりしぞ。あゝ海に漂ひ山路を辿り、遙々主を尋ね巡りしも何の爲!?彼は俄に惡鬼の征矢に打たれたらん如く底ひなき失望憂苦の淵に沈み了むぬ。

『あゝ我が慕ひまつる人類のメシア、猶太人の王は世に出て給ひしも人に拒まれさげすまれ、今や死に就かむとし給ふか、………おゝ夢!現!!數ふれば既に三十三年の昔とはなりにけり、銀星大空に現はれてメシヤの出現を告示し豫言者亦口を揃へ聲を大にして救主の降誕を語りしが………おゝ今しゴルゴタのほとり十字架の上、死罪に問はれ給ふ猶太人の王とは果して此豫言の君にましますらんか………』

アルテーバンは苦痛と惱みとに胸は早鐘の如く亂れ騷きて暫しは悶々の裡に心も闇と迷ひしが、この刹那、老年者唯一の慰籍ともみるべき懷疑の雲は忽ちに彼が身邊を鎖しつゝやがて彼は獨りつぶやきぬ。

『おゝ天上高き神の道は我等下界人類の測識推摩すべきものに非ず。我れ老ひたりと雖も尙ほも屈せず撓まずばよし敵の毒手に渡され給ふとも尊き主の御姿を拜するの機なしと云ふべからず。否恐ろしき十字架の上に鮮血を流し給ふに前ち、必す其が命乞ひの價として此の妙なる眞珠の玉を捧けまつるの折は來らむ………』

斯く心を定めたる白髮枯身の老聖者は、ダマスカスの城門さして物憂げながらも惱み疲れし足を運びぬ。

ダマスカスの關門を入るやマケドニヤの軍勢潮の如く市街に押し寄せ來りて、可憐なる一少女の破れ裂けたる衣、搔き亂れたる毛髮を攫みて號叫の聲を共に引き摺りゆきぬ。おゝ何等無殘酷薄の所業ぞや、此の悽慘の光景に打たれしアルテーバンは憐憫の情禁じがたく我しらず身を震はして打みやりぬ。

乙女も亦如何なる機會をや得たりけん、急に殘虐無道の毒手を掃つて老聖者が脚下に馳せ寄りさま、膝下

にすがりて切なる憐れみの情を求めぬ。蓋し乙女は此の老聖者が白き清らの頭巾と胸邊妙なる圓陣光彩とを認めたるなり。少女は聲打ふるはして叫ぶらく、

「尊き父よ、聖にして清なる神の慈愛に瀕して危急に逼れる此の身を助け給へ、妾とても亦マギー敎徒の一人、バルシアの一商賈たりし正敎徒の娘なれ。父は不幸にも早世せし爲め身は負債の償ひとして聞くも恐ろしき奴隷の群に賣られ侍れり、おゝ死よりも苦しき今はの耻を、父よ希くば救はせ給へ!!」

聖者は思はず身を縮めて戰慄きぬ。雲煙千百里、遙にハビロンの樹影涼しき棕櫚の並木に於て、あるはベツレヘムなる小家に於て此種の經歷を嘗めたる彼が胸は今や再び一種切なる苦悶——信仰の妙なる希待と熱愛の抑え難き衝動との葛藤——は一時に小さき胸を壓し思へば敬虔の飾り神明の花、主なる御前に捧げまつらんと誓へる二個の寶玉は既に——神の大に比すれば——云ふにも足らぬ人事躊躇の中に費され了むぬ。然も今や最後の聖旨たる第三の試み、之をこそ最終にして亦脫却すべからざる必至の運命とは云はあめ。

あゝ其は彼の福德なるか、さりとも最後の誘惑とみるべきか、彼れ自らと雖も恐らく語り能はざるべし、されど薄雲朦々たる彼が胸裡、唯一事明白なる事實は、其か到底免るべからざる必至の運命なることと之也。然り之到底脫却し得べからざる眼前の事實、神の下し給ふ必然必至の運命なりけん。

千々に碎くる胸の裡、一事の確然として動かすべからざる信念の御光りは可憐不遇の乙女を救助せんと之所詮は眞愛の人の當然なすべき行爲たる一念なりき。

生死以上危機一髮の秋に當りて此の清爽可憐の一少女の爲に老後の力を奮はんこと、之れ彼が心より喜びし所あゝ是人間靈能の光たる熱愛の表示、眞情流露の發作に非ずして何ぞ!?

斯く心の膽を固めし老聖者は急ぎ懷中より眞珠の御玉を取り出しつ、靜かに乙女の手中に置きぬ。おゝ如何に其が燦爛として光彩の輝かしきぞ、光り眩しき

眞珠の御玉は洋の東西、時の古今、此の瞬時程生々たる陸離の光りを放ちたりとも覺をず。老聖者は靜かに少女を顧み、

「可憐の兒よ、之こそは御身が賠償の寶石、我が主なる王の御前に捧けまつらんと造次も膚身を離さゞりし最後の御玉なれ………」

言葉なほ終らざるに天地晦冥大空暗憺、密雲朦々として大地は激動し閃電人目を眩せんばかり、耐え難き憂苦の焔を懷ひて悶え苦しめる人の胸もかくやあらんと恐ろしとも亦恐し。

析柄城壁崩れ屋根飛びて市街の混雜例ふるに物なし。空は黒雲愈深うして殆ど咫尺を辨せぬ物悽さ、さしも勇猛果敢のマケドニヤ軍勢も雲の子を散らすが如く蹌踉として遁け失せたり。さはれ敬虔なるアルテーバン及び眞珠の御王によりて生命の紐をつなぎし可憐の乙女はブレトリアム城壁の下唯正然として跪座禮拜したり。

あはれ三十三年の放浪の中、其さに辛酸苦痛を嘗めて二個の寶王を失ひ剩さへ最後とたのむ眞珠のみ玉を人手に與へて主を拜する希望の光りを失ひし老聖者アルテーバン、此の期に臨て何をか恐れ何をか求めむ。彼れが一點憧憬の火や既に滅せり、彼が一念燿炳なる希望の光り既に消えたり。然も尙ほ此の老聖者が胸裡一片の心情は靜寂平和の春光を唯して些の苦痛後悔の塵をも止ゆざりき。然り彼は初一念を放棄したるに非ず、悔恨苦悶したるにも非ず、唯日々おのが力の限りを盡したるを思ひ、樂しかりし過去の夢を回想しては一點平和と滿足の氣とを感受したる也。否更に深く美しき希待の泉を宿したる也。

アルテーバンは自己の運命に向ては極めて誠實なりき。彼は今も倘高き何物かを希待し熱望するの情は依然としてやまざりき。よしや初一念を貫徹する能はざるにもせよ、其は必定神の命し給ふ至大至高の聖旨なるを信じ居たりき。元より彼は「誘惑なき永生」の默示に接する能はざりし。いな此の後なほ地上生存の機能を永續せしめ得るとするも恐らく彼が前途は過去と

同一運命の支配下に立つならんとは、胸中窃かに自覺せる一條の信念なりけり、

析しも地上烈しく震動して高樓大家搖れ動くかとみるまに屋上の瓦石宙を飛むで拜殿に跪ける老聖者が肩骨をしたかに打ち碎きぬ。皮膚を破りて流れ出る血潮の泉あたりを紅に染めて、顏靑ざめ息も絶え／＼なる老聖者は我れ知らず白髮の頭を少女が肩に寄せて僅に衰殘の身を支へぬ。少女は聖が生死の痛手を一向に恐れおのゝきつ、之も力なけにふしまろべば、此の刹那天上仄かに美妙の樂音起りて細く麗しき天の御聲は耳元鮮かに胸裡に深く鳴り響けり。あゝ如何に其の淸にして高調なるよ　然かも漸次遠く仄かに細くなりて果ては一陣の微風にも消々ゆかんず有樣、少女は又もや驚異の眼を見張りて誰やらん窓の邊近う囁ける肉聲にもやと彼方の空を見上げしが、之ぞと思はるべき人影も無し。

やがて老聖者が唇は、天上かすかなる御聲に相應すかるとも覺えて靜かに動き初めたり。彼はパルシアの口調もてつぶやきぬ。

『おゝ神よ、我れ飢渇の窮境に於て鮮かに御姿を認め得たる時、此等憐れの人々に尊き飮食の美を以て奉仕せざりしや。旅路に疲れて寄るべなき漂浪の場所に御身を認めたるの時淸き憩いの場所を供へざりしや。寒に惱みし時には衣を具へ病床に牢獄に御姿を認め得たるの時、此のあはれ寂しの病客、貧兒に向て眞心を以て慰め看護の勞を取らざりしが。おゝ三十三年の星霜を日毎求め歩きし甲斐もなく遂に主なる君の御顏を拜するの期を得さりき。あゝ今に至るまで親しく奉仕するの恩寵に、洩れたりし此の身は、何等薄幸不運の因緣ぞや！』

折しも凉しく妙なる御聲は再び天上の一角より湧き起りて香はしき淸爽神美の微風と薰しぬ。乙女も暫しは此の神來の樂音に耳打ち傾けしが聲はやがて靜々と彼方大空の奥へと消え去りぬ。乙女は此の凉し妙なる天來の御聲を讀み得たらん如くなりき。

『吾れ誠に／＼汝に告げむ、爾親しく我が兄弟姉妹の

一部を救ひ恤みしが故に、我れ亦正しく爾が淸き信念と高き善行の供養とを享けむ！」

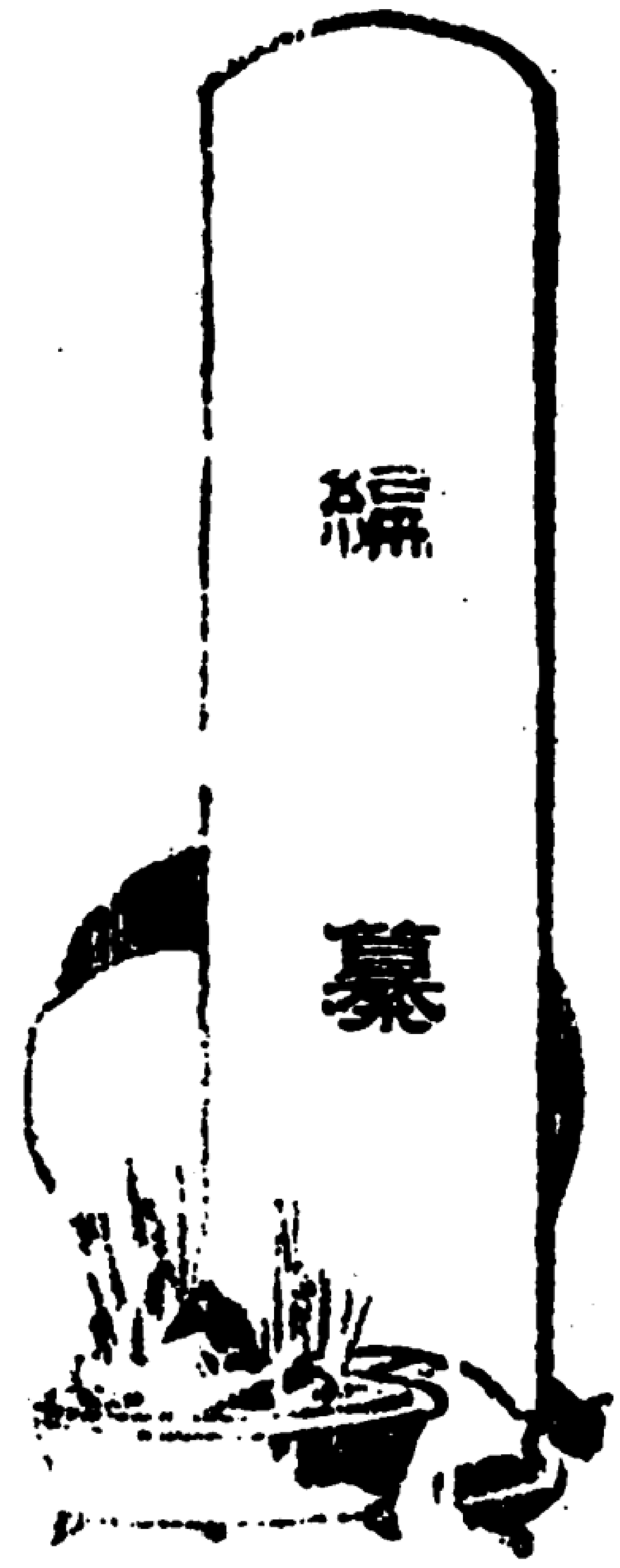
「一語肺腑に徹す」とは正しく老聖者が此の刹那の感なりけめ。蒼白たる彼が顔面は俄かに快異と喜悦との紅火を點しつゝ口唇震ふて胸の歡喜は抑ゆべうもみえざりけり　あはれ白雪積る峻峰の一角、榮ある曙光の女神が紅緑紫紺の翅に駕して生命と希望との光りを匂はしたるもかくやと覺えて尊くも亦嚴かなりし光景よ。

あゝ三十三年の年月をあらぬ異郷に漂泊て此處に親しく主を拜するを得たる嬉しさは、日頃の重荷の一時に投げおろしたる心地して、痛手の惱み、心の安睹、心身の疲れ一時に湧き起りて白髮老軀の老聖者は今し安らかに救ひの御園父なる御許をさして靜かに此の世の息を收めぬ。

* * * *

かくて長の旅路は終り、貴き三個の寶玉は嘉納せられ「さまよへる聖者」アルテバーン終に主なる王を拜して切なる心の飢渇を慰めぬ。

（完結）



ヘンリー、バァンダイク博士に就て

ジエー、エフ、グレシット

グレシット氏は先年ジヨンホプキンス大學卒業後日本に來りて東京學院其他に教鞭を取り目下我等と寢食を共にしつゝある人也。頃日ヴアンダイクの近業に就て雜話の末、特に此の一篇を本誌の爲め寄稿せらるゝことゝなりぬ。左に之を譯載して此の厚意を謝す。…………（一記者）

博士ヘンリー、ヴアンダイクは最近二十年間に於て亞米利加に現はれた詩人散文家の中最も卓絶せる作家の一人てある。博士の作品に於ては殆ど他人の企て及

ばざる數個の特點があるやうに思はれる。是れ其の名聲を高め多大の感興を讀者の胸深く刻み付ける所以であらう。今其の特質とも云ふべき諸點を擧げて見ると第一、高潮な宗敎的道德的調音に富むで居ること。第二、老若男女を問はず其の作物に對して何となく魅せられるやうな美しい人間趣味を與へてゐること。第三、其の作品をしてグードスタイルの模範たらしむべき語句の艶麗調章の如何にも高いことなどは十目の一致する所である。

博士はヴァンダイクといふ名前が既に明示して居るやうに和蘭人の血脈を受けて居る人で、其の幼年時代よりして敬虔の念に富むで居る嚴肅な基督敎の家庭に養育せられたのである。博士が此の幼年期に於いて受け得られたる修錬は今尙ほ其の生涯の如何にも活氣縱横なる宗敎的熱情に於て明に其の痕跡を認知することが出來る。幼年時代に於ては家庭敎師に依て相當の敎育を受け其の後中學の課程を履むで遂にプリンストン大學に入學せられたのである。

大學卒業後基督敎界に入つて宗敎學を修め數年の間は熱心に紐育市の壯大なブリックチャルチの牧師を勉めて居られたが其の説敎は如何にも聽衆をして皷舞激勵せしむる程の力があつた。此の熱烈の情はやがて其の作品や數多き著作の上に躍如として現はれて居るのである。

牧師として乃至は講演家としての博士は又嘖々たる名聲を博せられた。然し目下博士の近業とも見るべきは此等すべての業務を抛ち專ら母校プリンストンの大學に於て英文學の講座を擔任し側ら文學的著述に筆を採つて熱心に誠實に學生薰陶の事務に從事して居らるる一事である。

ヴァンダイク博士は其の青年時代に於て當時勅撰詩宗として榮えある月桂冠を頂いて居たテニスン卿の偉大なる感化を受けられたのである。博士は常にプリンストン大學の講座に立て此の大詩人と接觸親炙して居る事實を學生に話すのを非常に喜で居られる。で其の詩風の如きも自づと此の親密なる友愛の熱情に依て多

大の感化と影響とを受けて居られるのである。吾等試に其の詩集を繙いて見ると僅かにテニスン調の美妙優艶な詩風が至る所に躍如として表示せられて居る事實を主旨することが出來る。

講演者としてのヴァンダイクは僅かに特得の活氣を以て人心に深い感興と印象とを與ふる點に於て吾人の注意を脱却せしむることは出來ぬ。體軀は小さいが其の講話の態度語法などは自づと衆目の注視を集めて人を魅せしむるやうな魔力が潜むで居る。否博士の身邊四周には何とも云はず一種の磁氣があるやうで不知不識の中に融化し合體せられて論旨の印象を強固ならしむる唯一の利益となつて居るのである。

博士の文體は男子にも女子にも等しく喜び迎へらるべきものであらう。そして其の作品の總ては何か一つの使命を秘めて居るやうに思はれる。博士は先づ吾人の前に神を提供して此の自然の大界に於て將た亦人間社會に於て其が不可思議なる宏遠の御業を明して居る。其の物語りの如き極めて人生に忠實であるので、是に於て吾人の受け入れるべき感興は決して不健全な思想でないのみならず重要事件に觸れて居る場合には決して一時的浮動的のものではない。唯一意人生の高き目的に向て我等を誘導しながら眞に強い歡喜の一念を與ふるのである。かくて博士はエスキリストと密接に一致し和合して神に對する犧牲の一念を高め始て眞に幸福なる生活を送るべきことを指摘して居らるる。殊に我等が博士に謝すべき事は博士が自己日々の生活、自己一身の作品の中に赫炳たる生命の光りを歡受せしむるやうな眞に生きた生活の力を事實として吾人の前に提供して居る一事である。

路易十四世を論ず

福田市平

近世歐州に一星あり。路易十四世と呼ぶ。光輝燦爛、高く穹窿にかかる。群星爲に暗し。而かも其光漸く衰へて遂に天の一角に消えぬ。夜寂々たり、漠々たり、

亦宿昔の華麗なく、壯美なし。
路易はブルボン王朝中最も活躍したる君主にして、佛蘭西の隆盛は其治代に絶頂に達せり。リシエリユーの外交、マザリンの內治、コルベーの財政、ルボイ、ボーバンの軍備は已に佛蘭西の全歐に覇を稱ふるの基礎を築けり。恰も鞍置き手綱掛けたる駿馬の、鐵蹄大地を蹴つて騎手の一鞭を待てるが如し、名人之れを御せば百萬の里程も一瞬の間のみ。路易十四世は此時に出でたり。知らず、彼れ果して王良造父の徒なりしか。

王は五才にして位に即きしも親しく政を執りしはマザリンの歿後即ち彼れが齡二十三に達したる後のことなり。而かも晴天の霹靂の如く、躍然として表面に現はれぬ。全歐の同盟を敵とし連年兵を出だし戰へば勝ち攻むれば取り、敵をして肝を寒からしめ、親ら外交を指揮して黃白を散じ間諜を放ちて英國を惑はし。瑞典を誘ひ、以て自國の利益を增進し、ヴエルサイユの華宮を築き天下の美姬俗人學者美術家を集めて一堂に會し、敵も味方も等しく仰ぎ見て彼れを『大君』と謳歌したり。亦名實共に『朕は國家なり』その壯言に背かざるに似たり。夫れ果して然るか。

史家ギゾーの記述によれば、王が修學中なる王子に贈る書簡に曰く『御身は將來予の後を承けて、國家萬般の采配を取らざるべからず。而して未だ其が如何に天下の快事なるかを知らざるべし。歐州の諸國より山を踰え海を隔つる數千里外の蠻邦に至る迄て、宮中の秘密、政府の權變、外交の眞相、兵備の强弱、身閾外に出でずして、悉く予の耳に達す。之れを考慮し、時に裏を搔き、虛に乘ず。誠に天下の快事なり。御身の數學地理の攻究に比すれば雲泥の差なり』と。又た彼は大は條約の締結より、小は下級官吏の任免に至る迄て一々之れを調査したりと。之に由りて是を觀れば路易は熱烈なる政治道樂家にして、且つ精力拔群の事務家なりしを知るべし。

路易を時の英國王ジエームス二世に比すれば。帝王神權の惡夢に魅せられ、獨裁政治を布かんとせし點に

於て倶に其軌を一にすと雖も、彼我の間尙ほ大なる懸隔なき能はず。殊に國士民衆に對する態度に於て然り。ジエームスの眼中にはスチユーアルト王朝の永續、自己專權の確立以外、英吉利の國威を臣民の福祉は殆んと映ぜざりしものゝ如し。路易に黄金を掴ませられ同盟の爲に背き和蘭を捨てたるが如き、佛軍を招いて下院を壓制せんとしたるが如き、其の實證乏しからず。一世ナポレオン及三世ナポレオンに至りては邦上國民を念ふの情益々薄し。佛蘭西の帝位は之れ頭中を支配せし唯一の觀察なく。國庫破綻するも可なり、餓孚路に滿つるも可なり、唯ボナバルト朝の安全を貪るを得ばアルサスロレーンを奪はるゝも可なり、五十億萬フランの償金を絞らるゝも亦甚た愁へざるなり、若し佛國の王座を回復するを得たらんには。專政君主國の單位は君立なり。專政主義は換言すれば元首の自己主義に外ならず。故に斯の如くなるは自然の結果なり。然れ共路易十四世は利己の外に、愛國撫民の念を抱けり。之れ彼れのジエームス及ナポレオンと異る點にして、史家の專政君主(ジエームス)中の巨擘となす所以なり。ギゾー又曰く『路易の、初年の戰爭は凡て國力發展の爲になしたるものにして、決して私の野心に驅られたるによるに非ず』と。蓋し正鵠を得たる言なり、或は向はん、然らば路易は近世の意味に於る立憲君主と異る處なきかと。否らず。兩者甚た相似たるが如きも所謂似而非者なり。賢明なると暗愚なると、穩和なると極端なるとに論なく、專政主義の君主は到底自己中心の人たるを免れず。唯善良なる專政君主と否らざるものとの別るゝ處は、一は國立民衆も私有財産にして即ち自己の一片なり、故に之れを愛撫すべしとなし、一は五身のみが唯一の己なり、故に萬事を捨てゝも之れを保護せざるべからずとなすにあり。換言すれば、一は自身及領土臣民を含む大なる己(イーゴー)にして、一は自身のみを指す狹義の己(イーゴー)なり。路易の『朕は國家なり』と唱へしは、國家主權が彼の掌中に在るを公表したるものなるや明かなるも、佛土佛民悉く吾が私有なりとの意味も言裡に存するを信ず。

古來「劍を以て起るものは、必らず劍を以て亡ふ。」瑞典のチャーレス十二世然り、ナポレオン然り、路易も其例に漏れず。如何に佛の將士勇猛なればとて外征相踵ぎ、殆んと戎衣を解くに暇あらざれば鋭氣挫けざるを得ず、民心離叛せずんば、あらず。蜀の恙維遂に麾下の望を失ひ來て降を敵の軍門に乞ひしも、討魏の兵を出たすことの餘りに頻々たりしに基因す。况や路易の師を出たす、其名正しからざるをや。佛蘭西の財源枯渇せしも職として彼の戰爭に由る。

路易の戰爭を一貫して、當面の敵、歐州同盟の中堅たりしは和蘭のウイリヤムなり。「小國の君主、文雅なき野人、小賢しくも蟷螂の斧を揮ひ吾が一擧一動に容喙す、執念き奴かな」とは佛王の常に胸中に抱きし憤怒の情なるべし。「和蘭の役」は即ち和蘭を孤立に陷らしめて、之を一戰に蹴破らんとせしものなり。而かも遂に事成らず。蓋し一は祖先墳墓の地の滅亡を防がんとして戰ふ、小國を以て侮るべからず。一は領土侵略の野心に驅られて戰ふもの、大國を以て怖るゝに足らざるなり。和蘭の强味此處に在り、佛蘭西の弱點亦此處に存す。生死の巷に臨めば懦夫も尙ほ立つ、而かも和蘭王ウイリヤムは是れ不世出の英傑なるをや。

路易は戰爭によりて名譽と領土とを得たり。「大君(グランド、モナーク)」の讃辭、フランシコムテ、メツ、ツールベルダンストラシブルグの領土、皆其賜なり。然れ共西班牙王位繼承戰爭に一敗地に塗みれ、前に收しものは悉く之れを喪ふ。剩さへ印度、新大陸に於る佛領迄て割取せられ、憐れ歷代の怨敵英墺をしてウトレヒトに凱歌を揚けしめぬ。西班牙の王冠は孫フィリップ五世の手に歸せしも、佛國の王位を兼ぬるの權利を放棄したれば、路易の企圖は水泡と消えぬ。彼れが「チャーレス二世薨しブルボン朝の分岐隣國に蔓延するの機至れりとなし、ピレニースの障壁除きぬ」と歡喜せしは夢なりき。ジブラルタルの咽喉を扼せられ、ミノルカ、ネザルランドを割れたる西班牙夫れ何の用ぞ。牙なき狼、翼なき鷲なり。兼位の權利を奪はれしブルボンの分岐夫れ何の益ぞ。ピレニース山嶺の鐵壁は依然として聳ゆ。佛

國の蒙りし打撃は尙ほ深刻なり。民心離叛し、國庫匱乏す。革命の大悲劇、ナポレオンの勃興倶に此時に胚胎せり。路易十五年の官人常に「彼は洪水」と語れりと云ふ、十四世も微かに其轄轄たる激浪の響きを耳にしたりしなるべし。嗚呼路易は竟に劍を以て亡びたり。

切に恨む、路易に先見の明、百年の籌策なかりしを。時運は已に業に進めり。區々たる歐州問題とのみ執着するを許さゞりしなり。國際競爭の圏圍は早や世界大となり居りしに非ずや。奈ぞ歐州に費せし血と財とを以て之れを新天地に用ゐざりしぞ。印度及新大陸に佛蘭西大帝國の建設を見る眞に一擧手一投足の勞のみ。地の利は已に佛國に歸せしに非ずや。路易の之れに想到せざりしは、吾人をして流星光底逸ニ長蛇ーの憾みに堪へざらしむ。

晩年に至り路易は意充ち氣驕り、亦壯年の面影を止めず、平相國及豐太閤の末路と相似たり。英雄は古來色を好むと、惟ふに英雄老碌せば凡て色を好むと云はゞ却て眞に近からん。而かも洋の東西を論ぜず時の古今を問はず、百年の經營も美人の一顧眄に破れ、人若城を傾け國を喪ふ、誠に痛嘆に堪へず。豐公は一巾幗茶々の艶容に溺れ、路易は寵妃マインテノンの玉姿に迷へり。六億萬兩の資を投じ天下無比の王宮ヴェルサイユは成れり。王一日マイニテノンに戯れて曰く御身の爲めに天國を築けり。よもや不足はあるまじ」と。妃は嬌笑を浮べつゝ「さん候、此世に斯計り麗はしき宮居のあるべしとも覺え待らず。此上若し宮庭の芝生に銀雲降り布き、其が上を橇こど引かせんには如何ばかり樂しからん」と答へぬ。魂魄身に添はぬ王は唯々として諾したり。時に夏の最中なり。明くれは、あなや、昨日迄て綠草萌えし廣庭は一面に砂糖と鹽もて布き詰められ、皚々として雪野に異ならず。王は妃と倶に橇を命じ、宮女官人皆打興ぜりと云ふ。狂態も茲に至れは寧ろ同情の涙を促すに非ずや。

ナンテ勅令の棄却は王の破滅を告ぐる鐘聲なり。寵妃の意に出でしものあるや。否や明かならず。王自身の政治的謀略或は宗敎的偏見に因りしに非ざるは明か

なり。路易は宗教心の厚き人物に非ず、如何てか偏見を抱く程の熱情あらん。當時新敎徒は國内に於る產業上重要なる地位を占めたるには、之れを驅逐するは財源を枯渇せしむる所以なり。加之、事あらは路易ハ勢を敎がんと腐心せる列强奈んぞ之れを傍觀せんや。故に政治上より見るもナレチ勅令の廢止は得策に非ざりしなり。此暴擧の報至るや和蘭は卒先して新敎國を說き同盟を成立し、遂に「パラチネートの役」となる。此戰爭以來路易の爲す事皆利あらず、三世ナポレオンがメキシコ遠征以後運命の神に見捨てられしと相似たり。而して國威は下り、愛子は夭折し、王の末路は最も悲哀深かし。

路易十四世は固覇氣滿々、英俊剛邁の偉君なるも、深慮を欠き驕慢に過ぎたり。而かも彼は專彼若立の典型にして、古全を通して其右に出づるものあるを見ず。佛蘭西衰退の兆は之れを王一人に歸すべからず。他に一層根本的なる病源あり。即ち君主專政の國是其者なり。此主義に依れる國家は君主に英傑を戴くを得ば一時無上の盛大を致すべし。然れ共其隆運は絕頂に達せるものにして、以上の進步なし否な現狀をも永遠に維持する能はざるなり。尙ほ滿月の一夜は一夜より黑影に蠶食せられて瘦せ行くが如し。ミロレッモンーも路易の治世に自由なる國家機關の存在せざりしして痛論し、以て專政の弊を指摘したり。而して世界の歷史は此論理に實例を笑へ、覆轍を踏む勿らしめんが爲に存するもの丶如し。即ち專政主義は憲政主義に破られ、舊敎主義は新敎主義に斃され、貴族主義は平民主義に亡さる。政治界に宗敎界に社會組織に、凡て小數獨斷は失敗し多數共擔は最後の勝利を得たり。我が國の政治機關に自由ありや、我が國の敎會に自由ありや、我が國の社會に自由ありや、之れあらば誠に慶事なり。(完)

信徒の交り

仲宗根龍山

道德は地を掃つて影なく、聖者の言、會堂の鐘、

共に低く響き、サタンの聲徒らに高し。利を求むるの人市に充つるの今日友情の衰へたる亦當然のことなり。

現今の青年男女が氣力なし抱負なく動もすれば相率ゐて墮落の淵に沈まんとするのも畢竟は友情の衰へた爲めと云つてよい。而かも今日の所謂交友なるものは多く利害の關係によつて結びつけられて居る、利害得失の外に超然として立ち眞の友情によつて繋がれて居るものは誠に寥々として曉の星の如してある。一口に交友と云つても其中には色々ある、例へば學問上の友もあり財産上の友もあり或は娯樂の友もあり功名の友もある、が然し斯樣な友達は學問や財産の爲めに交つて居りますから其の學問や財産が無くなれば直ぐ離散してしまふことは丁度屍のある處に鳥が集り砂糖のある處に蟻が聚るが如きもので其の屍が盡れば鳥飛び砂糖が盡れば蟻散するが如きものであります。

先日某有權者の內に行つたら有權者先生曰く「今の代議士候補者等は選擧の間際になると中々親切なもので毎日の樣に來て頭を下げて呉れるがあれて當選でもした後は道に逢つても顧みるまいよ」と嘆じて居られたが　如何にも其通りである。國民の代表者たる政治家さへ銅臭其身邊を廻れば多年辛苦を共にし進退を同じうした政黨を捨てゝ他黨に節を賣る今日、決して怪しむべきではないが、如何にも殘念なことである。

杜甫は「翻レ手作レ雲覆レ手雨。紛々輕薄何須レ數。君不レ見管鮑貧時交。此道今棄如レ土」と云つて友情の衰へたことを痛く嘆じたがこれは獨り杜甫のみではない。

然しながら吾々は斯かる冷淡刻薄な世の中にも尙ほ温い友情が流れて居ることを見るときは實に愉快で且つ心強く感ずるのである、それは吾々信徒の交りであります吾々の交りは財産や權力や功名の樣な一時的のもので結ばれたのではなく永久不變の愛によつて繋がれてゐるのでありますから貴賤貧富は吾々の問ふ所ではないのである唯だ愛の力によつて所謂刎頸の友となることが出來るのであります。

讃美歌に

一、主のしもべの。むつましさは
　あめなるみたみの。さまににたり

二、こゝろあへば。ことばもあひ
　ひとつのねぎごと。さゝげまつる

三　むすびあひし。このともがき
　かはらじくちせじ　とこしなへに

とあるは吾々信徒の交りを遺憾なく歌ひ現はしたものと云つてよろしいと思ふ。

信者であると云ふことを知つた時は一種の力で引きつけられた如く骨肉の兄弟姉妹として名乘つた如く懐(なつ)かしい感を起すことは吾々の常に經驗する所でありますか其の偉大なる力は確かに吾々特有の寳であると思ふ而(さう)して一旦知り相合ふ様になつてからは富貴貧賤は勿論内外人種の別なく、共に樂み、共に憂ひ、或は相愛し、相敬することが出來る、實に此の親しき優雅な交りは他に到底見られまいと思ふ。ダビデもの其の京まうでの歌に

「視よはらから相睦て、ともにをるは、いかによく、いかに樂しきかな」と歌つてあるが吾々の交りは昔も今も決して變ることはない

人若し一度教會に入るならば會場は悉く和氣藹々として百花爛熳鳥聲喜々たる陽春三月の様で、視るもの聞くものをして自ら樂しき感を起さしむることが出來ようと思ふ。こゝが少なくとも他に異なる所であらねばならない、此掬すべき愛情に充ち滿ちて居る所で御互ひ相愛するの念慮を養ふことが出來ると云ふは誠に結構な話である。木は火に燃え、石は熱に暖くなるのである。木石すら尚ほ然りであるから吾々の温い交り、吾々の聖靈的結合は、やかて此の物質的腐敗と、精神的墮落とをなしつゝある社會を潔め神の御國を建設することが出來ると思ふのであるがこれは決して空想ではありません。

此の吾々の友情即ち聖靈的結合は國家組織の上にも必要であります。これによつて立つ國家は堅牢でありますが左もなき國家は其の基礎に於て、薄弱なること

を免れないのであります。而して此の聖靈的結合は善美を意味し平和を意味するのであります。平和は夫の福音である。紛亂爭鬪の此の世界をして平和の樂園となることも吾々の靈的結合を置いて外に求むることは出來ないと確信致します。列國は昨年萬國平和會議を海牙に開きながら一方では兵備を嚴にして互に睥み合ふと云ふ有樣である、これは即ち世界の人類がキリストにより一つとならないからである。愛によつて結ばれないからである。全世界がキリストにより統一せられ一ツの聖靈的團體を形造る曉が即ち眞の世界平和の時であります。斯くの如く信徒の友情、即ち此の靈的結合は世界の平和に向つて重大な干係を以て居るとすれば吾々信徒たるもの益々此の靈的結合を固める必要がある否なこれは吾々の使命である、吾人此使命に對し大いに盡す所がなければならないと思ふ。而して亦十字社事業の如き通信同盟事業の如き、平和的偉業は婦人の手によつて效を奏したことを思ふ時は、日本の姉妹諸君も世界平和の爲めに奮鬪されねばなるまいと思ふ。時に廿世紀は吾々日本國民の活動舞台であります。世界の平和と云い、宗教の統一と云ひ、斯かる大事業は、偉大なる日本國民にあらずんば成功することは出來まいと信じます。吾等青年男女は又自ら此決心がなければならないのであります。日本國民は一小天地に悶々として居るべき秋ではない、今後歐州諸國へも傳道に行かねばならぬのである、又これが世界の大勢であると思ふ。これは決して誇言でも何でもないのである。

私はこの信徒の交りてふ題を結ぶに當り一言申し度いことがある。世の中には、自分は信仰もなく愛情もなくして唯だ良友に乏しきことを嘆ずるものが多い、が然し友は鏡に寫る如きものである、自分が美しければ鏡中の影も自ら美しいのである、それが若し良友を得ようと思はるるならば先づ神の愛を受けて自ら他人の良友とならねばならぬ、左もなくして、徒らに良友なきを嘆ずるは、恰かも、自分の顏の醜を問はずして鏡中の影の美しくないのを咎む樣もなのである。(完)

黒木大將の米國婦人觀

編輯小僧

ニューヨーク五月十七日――

將軍は昨日ウエストポイントの陸軍大學に於て見聞したる事物に深くも感與を覺へ居らるゝが如し。蓋し是れ將軍が米の風物に接したる普偏的感與と謂ふも妨げざるべし。

黒木將軍の米國婦人に對する感想は又大に高遠なるものあり。將軍一日快遊船に乘してホドソンの流れを遡りウエストポイントに向はむとするや船長スミスに向ひ極力米國婦人を愛好する者なるとを語り、彼等米國の婦人が如何に愛嬌に富み佳麗優雅にして纖袖なるかを稱美し、就中ブルネッテースタイル（毛髮眼光薄黑のもの）を喜ぶ旨を語られぬ。怜悧なる船長スミスはやがて帷帳に掛けたる二枚の米國美人畫を進めぬ。一は純白なるブロンデースタイル、他は薄黑色なすブロネッテースタイルの美形なりしが將軍は其の後者を撰びて秘藏せられぬ。蓋し其の黒色なす眼光の如何にも女らしく美しきが特に御意に叶ひたる故なりとぞ。

本文は昨年五月亞米利加ゼームスタウンに於て開かれたる萬國陸海軍大會に於て日本陸軍の代表者として出席せられたる黒木大將が亞米利加巡遊中の一記事也。不圖した機會よりして當時盛に大將の武勇を賞讃し歡迎の意を表せる新聞記事に接したるをにて此に抄譯掲載することゝなしぬ

虹の松原奇談

（附、肥前佐賀地方の古傳說）

一記者

自分は嘗て雜司ヶ谷の森邊金山の臺地に暫し寄寓して靜かに清風光月と親むだことがある。當時のことを思ふと今尙ほ非常に愉快な記憶となつて胸裡に深く殘つて居るが、或る冬の一日であつた、自分はいつもの如く駒塚橋畔孤燈夢の如き書中を急いで學校から家に歸り夕飯を濟まし火爐を擁して何くれとなき談話をや

つて居ると主婦なる五十路の老婦人は突如として、

「あなたのお國には猫は居りますか？」

と尋ねる。自分には此の突飛な質問が能く理解らなかつたので

「なぜですか。私の國だつて鼠は居ります。猫もいなくては……」

シッペイ返しを喰した積りで居ると先方は妙に意外千萬だといふ面持。

「へーさうですか、私肥前には猫は居るまいと思ひましたら……

一人で切りに意外の感に打たれて居る樣子。が自分には何だか濃霧に物を探して居るやうで如何しても其の眞意が讀めないので

「一體まあ如何なわけです」

と一刀切り込むでみると、お婆さんは若い時分に好で「嵯峨の夜櫻」を讀むでいたといふ。始めて疑問の奥底が理解つたのでそれからは「鍋島の猫騷動」が話題に上つて飛むだ所に花が咲いたことがあつた。

皆樣も定めし「嵯峨の夜櫻」といふ怖い物語はお聞きになつたでしようが、今も尙佐賀の城下を南へ一里餘り、本庄といふ一村落に鍋島家累代の菩提寺がある。欝然とした樹林は晝尙暗く何となう物淋しいやうな懷かしいやうな場所である。殊に物語の中に現はれてくる人々の墓標や名前などに接すると何だか炎天戰慄の氣に打たれるやうですゞろ悽愴の感じがわいてくる。勿論這般物語が事際にあつたらうとは思へないが、然し事實として此の物語が秋の夜語り爐邊の談話などに上つて居ることだけは今も尙ほ否定することは出來ぬ。

「自分の生れ故郷は此の佐賀の城下――明治の英傑大隈伯を出した――榮城を去ること西北三里、黄城五萬石の城下である。此處は鍋島三十八萬石の分封地で鹿島蓮池と共に鍋島の御三家とも云ふべき所である。が人家は僅か五六百、一歩を東西に踏み出さむか、見渡す限りは茫漠たる筑紫の平野て、稻田延々として夏秋の頃ともなると鏘々たる稻穗の風にそよぐ物音がな

つかしく開れる。北には天山の脈絡巍峨として雲間に聳え、南は遙か筑紫の海を越えて温泉の高降を遠望することが出來る。一般風俗などは寧ろ簡素質純の方て餘り多く近世輕薄の思潮に影響せられてもないのは慥かに自然美の一大恩寵であらう。住民は概して敬神の念慮に強い。殊に我が知れる人々は毎朝炊き立ての御飯を神に供へて日參をしている。鎭守の神は天滿宮。そして天神樣は梅がお好きだといふので家每に梅樹を植へ木の實を捧げ其の核子と雖も苟もせないといふ有樣である。

* * * * *

小城町を一里、崎嶇たる山路を上りて北行すれば淸水の瀑布がある。懸崖切るが如く飛瀑八十尺鞺鞳として純白の布を懸けたるが如し。高地の一角には觀世音を祭れる一大殿堂が立つて居る。正月十六日、雪花舞ひ飛ぶ寒中を觀音の御子たる信者の一部は二里三里を遠しとせずして赤裸となり褌一本に白の鉢卷甲斐〴〵しく馳足喊聲少壯中老の男の子二三十人一隊をなして來拜し此の瀑に打たれて信念を凝らす。誠に是れ天下の一大奇觀である。

尙ほ飛瀑八十尺、水勢の落下する所岩碓奇岩の頂上に一座の觀世音いまして信仰厚き善男善女の眼には其が尊き御姿、優し美しの御顏が手にとるやうに打ち眺めらるゝよし云ひ傳へて居るけれども我等無知無明の悲しさは如何に凝視佇立するもたゞ徒らに飛瀑の音に胸を轟かすにすぎない。

昨夏歸省の序でに、自分は久しく都門の塵に埋れて故園の風光と遠かりしものから此の懷かしき山奥を訪ふて心より大慈大悲の御手に接しては審美無我の境涯を喜だのである。

忘れもやらぬ八月廿七日の夕。晝間の暑さを忘れむものと親しき友と夕風涼しき夜氣を喜びつゝ、星夜に家を出てゝ淸水の瀑を訪ふた。途上草々の物語りに路はいつしか羊腸崎嶇たる坂路にかゝり遙か脚下に點々たる燈火、さては軒端に釣せる岐阜提灯の光りなど打ち眺めながら、都門の人士に此の樣を……と思はず

口滑らして打ち笑へばさながら現世以外に遊びている心地がした。

かくて清水の宿に着き二人は鬱然たる林地を抜け小川を沿ふて瀑下に進み走つた。夜は深々として天地寂寞。豪然たる飛瀑の音身に泌む如き涼風の氣、いつしか身心奥裡の琴線を動かして夏ながら竦然としておのゝいた。やがて二人は喜び勇て瀧壺に躍り込むだ。

あゝ此の刹那自分は云ひ知らね胸の清爽を感じて御空に輝く星光を打ち仰ぎては飛び散る泡沫の美しさに頭は自づと垂れて合掌岩頭に夫なる神の大恩を伏し拜むだのである。

飛瀑八十尺しぶきは胸に星の夜

一句當時の感想を盡して餘蘊なかるべしと信す。

* * * *

余は思はず筆を横道に外らして著しく題意を遠かつてしまつた。では愈々筆を本題に進めて虹の松原奇談に就き少しく我が聞き得たる所を述べることにしよう。

讀者諸姉は必ず豊太閤の三韓征伐を心に記し給ふならむ。之と同時に肥前名古屋の名稱も諸姉の記臆に新たなることと信ず。

名古屋は肥前の西南端、玄海の灘に瀕せる風光絶美の一漁村で、晴天雲なき日には眼前に壹岐對馬の二島を浮べ朝鮮の片影も仄かに打ち眺められるのである。

名古屋を去ること東八里、特別輸出港として小笠原の舊城下として有名なる唐津の港がある。此の唐津と東濱崎との間を連ねて白砂青松の一林地が蜿蜒と寄せくる波を枕に美妙の樂音を奏でて居る、是ぞ海に臨み山に倚り延々二里の長途を覺えず一息に歩き盡さしむる虹の松原の風光である。目下夏期の清遊地として避暑の客も多いが鷹島、鳥島、烏帽子島などを眼前に望むで海波の中に身を任せた心持は迚も筆紙などに書き現はすことは出來ぬ。

此に奇體なことは此の延々二里の松原に、絶えて夏蟬の聲の聞えぬ一事である。始め余は氣候のせいか、さりとも玄海より吹き來る潮風の烈しき爲にもやと獨

り不審の理に彷徨つて居たが、ふと理論以上學理以上の趣味ある物語を一茶店の老翁に聞かされてさらりと疑雲を脱却することが出來た。老翁の語る所を筆記してみるとかうである。

『今は昔、豊太閤三韓を征し給はむとて日本六十餘州の軍兵を促し自ら肥前名古屋に本陣を据へて遠征部將の指揮をぞなし給ふ。一日徒然の餘り群臣數多引き具して一日の清遊を名にし負ふ舞鶴（唐津）の城下に試み白砂青松、見るも涼しき玄海の磯邊を横りて虹の松原に轡を散し給ふ。頃しも夏は眞盛りにて暑さ耐え難きも此處のみは松間清澄の風薫り海波の音胸裡を洗つて自づと別天地の觀を呈せり。然も夏蟬の聲喧しく喧擾騷呼を極むるものから豊公厭はしさの情に耐え給はざりけむ、大聲『默れ！』と一渇し給へば數萬の蟬軍流石に豊公の威武にやおぢ恐れたりけむ、其の後此の地には蟬の聲絶え盡したりとぞ云ひ傳へたる』

かくて千餘年の今日、世は西歐文化の華麗に醉ひ、田園幽雅の妙趣を毀ちて得々たる悪思潮は此神美の境致にも流れきてさしも優麗神美なりし白砂の松原に馬鐵を通して馬蹄騷呼の煙塵を揚ぐるいまいましさ。豊公をして若しあらしめば……とすゞろ五百年前の當時が偲ばれてならぬ。されど豊公の偉靈や尙盡さざりけむ今も尙ほ事實として此の松原に蟬の聲なきも亦面白いではないか。

虹の松原に就ては尙云いたひことがあるが傳説に關係が遠いので皆省くことにした。讀者は昨年九月（？）頃發行の太陽江見水陰氏の「虹の松原」の一篇を參照せられたら屹度此の文の足らない所を補ふて餘りあることゝ信する。



女子青年會記事

●會員諸姉に申上候

（前號記事其の儘）

●「ひとりぼつち」の出版

記者は心より「ひとりぼつち」の出版を讀者諸姉に報告するの事を喜ぶ、

本書は久しく女子英學塾に教鞭を採つて居らるる河井道子辻村清子兩女史の合譯に成つたもので此の程美装して博文館から出版せられた四六形の美本である。記者は此の愉快なる報導を得て早速本屋まわりを始めたが生憎何處へ行つても見付からぬ。河井氏は女子青年會の中央委員辻村氏は熱誠なる本誌の寄稿者として陰然雜誌編輯の事務に多大の助力を與へ下さる人の、義理にも讀てみねばならぬのだが、何度本屋まわりをしても手に入らないのでとう／＼本號〆切までに間に合はなかつた。で、殘念ながら此には此の快事ありしことを報告するにと止めて批評と紹介とは次號にまわすことにする。が原著者が女流作家だけに「水銀のやうに清く獨樂のやうに敏捷な」英國の一少女を本篇のヒーロインにしてあるさうだから其の清鮮な天眞無邪氣な描寫は近來流行せる自然派の作物にのみ厭きはてた日本小說壇には珍らしい一種の感興を與ふるに相違あるまい夏期の讀物としては好個の著書であらう。何れ詳細のとは手に觸れた後に讓つて此處には唯出版の御喜びを著者に捧ぐると同時に讀者諸姉に新刊の御通知をする位で一先づ筆をとめて置く。

●小石川傳導女學校青年會報告

麗かなる春の日小さき集りに候へど每週午後三時半より主のみめぐみの許に靜かなる集會を開き得られしは誠に幸におぼえ申候。感謝とともに本年三月四月に於ける集會につきて大略は報告致し度く候。

一、三四兩月に於て開きし會の種類

講話會　　役員祈禱會。
役員會。(協議)　送別會。

一、會の總數　十一回
　內　講話會　五回
　　役員祈禱會　三回
　　送別會　一回
　　役員會(協議)　二回

一、集會者總數　百三十二名
　內　正會員　八十八名
　　準會員　四十四名

一、四十一年三月六日役員滿期につき役員改選を爲したる結果當選者左の如し
　會長　白川さく子
　書記　松南雅子
　會計　今井さく子

一、四十一年三月二十日午後三時半より傳道女學校卒業生の爲め送別會を開きて主のみまへにたのしき小時間を過しぬ

一、三四兩月に於ける入會者五名。

右之通の御報告申上候也

小石女子傳道女學校內女子青年會

四十一年五月二日

書記　松南雅子

●京都同志者女學校青年會報告

草木すら惠の雨に濕ふきのふけふ皆々樣神のみ惠によりてます〳〵御きげん麗しく渡らせられ候よしよろこばしく存じ上まゐらせ候下りて當會も皆々樣の御指導によりて近々發展に趣き居候間御よろこび下され度候。

さて當會の近狀申上候へば例の如く一月に二度の集會の外になほ今學年より毎週月曜日午後三時半より一時間特に校外同窓生のためにとて聖書研究會相開き居申候。

家事多忙なるにも係らず市內の各所より多くの同窓の諸姉來會せられ極めて有益なる集を開き居候。

又其他毎週木曜日の午後三時半より四時半迄特に日曜學校に興味を感じ居らるゝ教師を招きて日曜學校委

員の爲め準備會樣のものを設け居候。

其他は別に變りたる事も無之候先は右御報告迄

かしこ

五月十日

同志社女學校女子青年會

役員改選の結果

會長　松田道子

書記　多田艶

◉萬國女子青年會名古屋支部記事

四月四日　土曜日

當日午後二時を以て第五回名古屋支部女子青年會を聖使女學院內に開く。嘗て名古屋地方裁判所長深野達氏に民法に就ての講話を依囑しありしも俄の差支ありて其講話を聽くことを得ず。依て之に充てたる時間を室內遊戲に代用し以て會員一同の娛樂に供せり。後三十分間支部長より英語唱歌の敎授あり、夫れより一同講堂に集り讃美歌を唱ひ開會の祈を捧げたる後委員より會員一同に式の事項につき協議及び報告ありたり

一、女子青年會の廣く世に紹介し神の榮光を一層顯著ならしむる目的を以て遊戲講習會を來七月開會することに付き。

一、規則書第九條により外國の會友は交際を望む者は既に英國會友中四五名より交際希望の申込ありたるにより其氏名を申出すべきこと。

一、會員岩田ふゆ子姉傳道補助の爲廣島に移轉せらたること。

右講習會の件は全會員一致可決せり次にミッセスローランスより「信用すべきもの」と云ふ題につき馬太傳七章二四―二七を引證とし人間は其生活の基礎を岩たるきりすとの上に建てざるべからざることに就き懇篤なる一條の講話あり。次て讃美歌閉會の祈りて以て午後六時會を閉づ。

前席會員三十名
讃助會員二名
新に入會せし者三名
現今の會員數六拾二名

◉青山氏よりの報告

三月以降の當青年會に於る狀況左に御通知申上候。

三月二十四日午後深井會長の司會の下に此度卒業して出でらるゝ四十一名の會員の爲送別會を當校講堂に於て開く。同席上にて川口教會牧師名出教師の有益なる演説有之候。

四月十三日、當校開校の日には兼て委員會に於て相談し置きし事とて各委員は三々五々或は門に或は玄關にて新入學生を迎へ、青年會室に導き、かしこにて雜誌など示し談話などして接待の任に當り申候。かゝる場合の外實際會員が平常殊更に學校全體の爲めに働く機會は比較的少き樣覺え申候。

五十余名の新入生、即ち未來の會員たる姉妹等を滿腔の喜と望とを以て迎へし我等は、四月二十日午後會長の司會の下に歡迎會を開き候。校長、教頭、副會長の歡迎の詞あり次いでミス、アレキサンダー當青年會の目的主義等に付き大略を説明せられ申候。式を終へて餘興にうつり四時散會、一同の顏には喜色のあふれたるを見受申候。

此度我々の信仰上に聖書朗讀の更に必要なるを感じ候ため各級を通して一定の時間を設け候。

又昨年九月以來定めし青年會の業務は何分一同不經驗の事とて著しき成功は見え申さず候へ共毎月一人の孤兒を養ふため四圓を送り、四月末の計算によれば尙數圓をあまし居申候。時日を經るに從ひて利益も增す事と信じ申候。先づ最初としては全々失敗にもあらざるやに覺え申候。

左に四月新に撰擧せられし諸役員の姓名を御通知申上げ候。

會長　深井だい子
副會長　山本きよ子
記錄書記　迫田つろ子
通信書記　青山はん子
會計　遠藤たつゑ

續紛錄

◎晩春初夏の候愈御淸安御勉勵の由爲邦家欣喜至極に存候。卷頭記載致置候通り本年の夏期講習會は七月十

四五日の頃と略々決定致置候。時は炎熱酷暑の折柄此の尊き靈的集合に品性修鍊の上に乃至は社交親和の上によりて少からぬ功果あるとは今より竊に喜び申候。

◎本號には明治學院長井深梶之助氏の玉稿を掲載する筈の處目下殊の外御多忙中の由にて一回訪問致し候折の如き事務室の一隅十數通の書翰を手にして頗るせわしさうに見受申候。爲に掲載の榮を得ざりしは千秋の遺事に候。又女子英學塾長津田梅子女史よりの寄稿も父君御不幸の故を以て載錄するの好機を逸し申候。右の都合にて本號には新渡戶博士の高話のみを掲載致すことゝ相成申候。尙其中機をみて井深氏津田女史の玉稿高話も御紹介致すべき折あることゝ存申候。

◎新年號以來本誌に掲載致し居候櫻喬氏譯「さまよへる聖者」原文 'The other wise man' は愈本號を以て完結致し候。尙次號には豫告にも見え候如く同氏の譯稿に係るヲーッヲースの敍情詩ラォダーマイアの一篇掲載せらるべく候。艶麗の筆、熱烈の想亦一讀の値ある者と信じ候。尙ほ名古屋市發行新曙光といふ八頁の月刊新紙に湖風といふ人「一人博士」の題目を以て同じヴァンダイクの The other wise man を譯出致し居候、兩者を比較對照せば讀者にとりては至極の御便利かと存候。

◎次號は更に趣味の一欄を加へて讀者諸姉に見ゆるを得べくと存居候。由來雜誌「明治の女子」は日本基督敎女子青年會員の衞生社交知識靈性上の發達を圖る爲めの機關雜誌に候へば目下の處種々の點に於いて改良革新すべき餘地あることゝ存候。此の意味に於いて吾人は門戶を開放して會員諸姉の手に成る各種の投稿を歡迎致すべく候。記者も亦靈性上の家庭欄に乃至は文藝趣味欄に微力ながら出來得る限り粹盡致す覺悟に御座候。

◎紐育ユニォン神學校長シーシーホール博士は三月廿三日遂に他界せられ、熱誠なるクリスチャンとして明治文明の先達として靈界一方の重鎭たりし津田仙翁は去月二十八日遽然として永眠致され候。吾人は殆ど時を同じて此の二大偉人を失ひしことを深く惜むものに候。此に謹て吊意を表し置候。敬白。